

証言 連合赤軍

— 1 —

大菩薩への道

連合赤軍事件の全体像を残す会編

証言 連合赤軍

－ 1 －
大菩薩への道

連合赤軍事件の全体像を残す会編

「証言」発行にあたって

連合赤軍事件の全体像を残す会

連合赤軍事件から30年以上の歳月が過ぎ去りました。

事件当時に産まれた子供たちが成長し、結婚し、新しい生命を育むに足りるほどの年月です。

この間、私たちは犠牲になった仲間たちのことを、ひと時も忘れることはありませんでした。

残された私たちに、何ができるか。

これが、16年前の1987年に「連合赤軍事件の全体像を残す会」のささやかな活動を始めた時の出発点でした。

人民の運動史に大きな傷跡を残した私たちはなにをなすべきか？それぞれの持ち場で、かつての私たちの理想を引き継ぐ運動を継続すること。それはもちろんとして、一連の運動と事件にかかわった当事者としての証言と、正確な記録を残すことは、最小限の義務なのではないか。

興味本位の歪曲された著作はいうにおよばず、何人もの作家が連合赤軍事件をテーマとする真摯な作品を上梓するのを見たとき、とりわけ、訴訟上の必要から記述に偏りのある供述調書さえ、確定後一定の日時を経た後は廃棄される現実を知ったとき、当事者としての証言と、正確で多面的な記録を残すことは、なににもまして重要な課題であると私たちは考えました。

このようにして、統一公判控訴審判決のあとの懇親会を行っていた居酒屋で、記録を残すための活動が始まり、翌87年の1月に「会」が発足しました。

以後、毎月のように会合を持っていた初期から、年に数回、半ば飲み会のようにして集まっていた時期も含め、多数の関係者の協力

を得て、聞き取りのテープがたまっていきました。多くの人たちが、私たちの要請に快く応じて、数日の聞き取りの会に参加してくれました。こちらから出かけて行って、話を聞かせていただいたこともあります。

「残す会」には、当事者だけでなく、当時、運動に関わっていた人たちが、当事者の友人、さらに、運動とは無縁だった人も加わりました。

会が発足した1987年の12月に、17回忌の法要を持ちました。その時大阪から参加した若宮正則さんは、数年後にペルーで亡くなりました。初期の運動の推進力で、17回忌法要にも僧衣で参加していた三戸部貴士さんは、八王子で行った「残す会」の合宿に、入院中の病院を抜け出して参加してまもなく、他界されました。

会の活動を始める少し前、三戸部さんたちと倉淵村を最初に訪れたとき、埋葬地の杉林は鬱蒼と茂り、地元の僧侶が建立した「阿字の子」の慰霊碑は、光の射さない薄暗い木陰に建てられていました。(慰霊碑には、「阿字の子が阿字のふるさと立ちいでて、また立ち戻る阿字の故郷」と刻まれていました)

しかし、事件直後に遺族の方が送ってくれた写真では、杉林も植林後余りたっておらず、人の丈ほどの若木が明るい草地に伸びていたのです。

皆でお参りしてからさらに10数年経った、いまから6年前の1997年の5月、「跡地を巡る」慰霊の旅に何台もの車を連ねて回ったとき、埋葬地の杉林は開発されて跡形もなくなり、大規模な養鶏施設の敷地となっており、「阿字の子」の石碑は移設されて、事件当時のように若い杉の木立に囲まれていました。

このように長い年月、私たちは「連合赤軍事件の全体像を残す会」の活動を続けてきました。その間、膨大な量の聞き取りのテープが溜まって行きましたが、公表の準備は遅々として進みませんでした。

2003年2月、事件後30年を期して「殉難者追悼の会」を開催しましたが、これを機にようやく公開の計画が具体化していきました。

そろそろ、記録を公にする時期が来たのではないか。当事者にとってなまなましく、傷口に塩を擦り込むような思いが、薄皮をはぐ

ように消えていった年月を経て、ようやく、公開が可能な段階になったのではないか。

他方、関係者の中にも物故者が現れ、時機を逸すると、残る関係者からの聞き取りや、会の成果を検証していただく機会も逃してしまうことが危惧されました。

このようにして、次のような形での公開が計画されました。

- ・インタビューの内容を正確に記録する。
- ・定期的に隔月に発行する。
- ・3年程度で完結するように計画する。
- ・残る関係者からの聞き取りも、余さず行うよう、努力する。
- ・制作、発行の費用は、予約購読料によってまかない、年額(6号分)6000円とする。
- ・購読の呼びかけは、関係者のみならず、研究者、図書館などに対して広く行う。

皆さまが以上の趣意にご賛同くださり、「証言」を購読していただきますよう、お願いいたします。

2004年4月

目次

「証言」発行にあたって	i
解題	2
大菩薩への道―八木健彦赤軍派を語る	3
赤軍派結成に至る第二次ブントの転換点	3
「一向過渡期世界論」と「前段階武装蜂起」路線	8
世界革命の第三の道	10
赤軍派フラクションの形成	12
学園闘争と労働運動に対する位置づけ	15
左翼運動の後退・社会主義の陥没	20
社会的視点のない運動	24
共産主義化という精神主義	29
7・6内ゲバの経緯	32
前段階武装蜂起の敗北	36
国際根拠地の夢想・大菩薩への道	40
具体性なき「前段階武装蜂起」	46
リアリティのない日本の左翼運動	49
山田孝さん追悼会	関 博明 52
端正で剛直な「兵士」の証言『連合赤軍少年A』	雪野建作 54
註	58
編集後記	68

解題

大菩薩への道―八木健彦赤軍派を語る

八木健彦は奈良県出身、京都大卒の元赤軍派政治局員である。赤軍派の指導部にありながら、常に冷静に事態を観察しているという、珍しいタイプの人だったといわれている。その評判どおりの個性の現れたインタビューになった。

このインタビューは1988年1月10日に都内三多摩地区某所で行われた。参加者は八木健彦のほかに、発言順で三戸部貴志（元ML同盟議長、故人）、森輝雄（元赤軍中央軍中隊長）、雪野建作、関博明、前澤虎義、村井千衣子、佐藤保、山中幸男、京谷明子など、総計十余人である。当日参加しながら一言も発言しなかった者もいたのだが、正確な記録がない。結構な人数、顔ぶれが集まって、「世が世なら何町謀議とか言われかねないところだ」と思ったものだ。

前半は時折質問、感想を交えながらインタビューの形式を保ったが、後半はほとんど座談会になった。比較的に自製のきく者とそうでない者との差はあるものの、参加者それぞれ、「思い」の深さ、重さが発露しての結果である。

インタビューから今回の発表まで十年有半経過している。これまでにさまざまなインタビューを続けてきたが、今後はできうる限り継続的に発表していきたいと考えている。皆さんの批判、叱責、またご協力をお願いします。

関 博明

大菩薩への道―八木健彦赤軍派を語る

赤軍派結成に至る第二次ブントの転換点

八木 赤軍派について話すのであれば、第二次ブント（註1）に遡らなければいけない。

赤軍派の前身的な、第二次ブントにおける転換点みたいなものが、68年の秋にあったわけで、この転換点から赤軍派のモチーフが生まれたんじゃないかと思う。第二次ブントは一言でいえば、67年10月8日の羽田闘争（註2）以来、「国際主義と組織された暴力」（註3）ということですとやってきて、特に68年頃の展開、いわゆるエンブラ闘争（註4）からさまざまな基地闘争があって、三里塚闘争（註5）があって、そうした闘いの中で、中央権力闘争（註6）ということ強調していた。

それは、ひとことでいえば「政府打倒!」。中央で権力闘争としてやんなきゃいけない。とりわけ中核派（註7）なんかがエンブラ闘争や基地闘争に力を入れていたのに対置する言い方で、個々の政策に反対する闘いだけでなく、それらを全体として集約する考え方。特に政府打倒、中央で権力闘争としてやんなきゃいけないという考え方だった。68年からはそういう方向でやってきた。その一つの頂点として10・21（註8）の防衛庁闘争があった。

実は、この10・21の防衛庁闘争をめぐって、火炎ビンをなげるかどうかで、政治局内部でかなり激しい延々たる議論があった。この時点ですでに、内部的に分岐する傾向性は生まれていた。特にその時、防衛庁闘争で火炎ビンを投げるべきだと強行に主張した先頭に、後の赤軍派のメンバーがいた。結局あの時は火炎ビンは投げていない。丸太で突っ込んだだけだった。その時にもう一方で新宿の騒乱罪の闘争があって、それをどう評価するのかということがあって、運動論的に「中央権力闘争」と「マッセンスト」（註9）みたいな方向で

集約していた。

さらに引き続いて11・7（註10）にもう一度闘って、大量にパくらただけで、大して何もできないという惨憺たる結果に終わった。そしてこの時、秋の闘争の総括をめぐってもめちゃって、当時のブントの指導部は交替する。

佐野茂樹議長、塩見孝也書記長が退陣する。当時のブント内の左派を代表していた部分が、総括できなくなってしまい、その頃から次は武装闘争しかないという考え方がモチーフとして芽生え、語られはじめるという状況になった。

もちろん第二次ブントも、党派部隊を組んで行動するけれども、それはあくまで大衆闘争を徹底的に牽引していこう、その突出力として自分たちが展開してゆこうということだった。その時点で、正確に分析するわけじゃなく、直観的・経験的な判断で、力関係とかいろんな状況をふまえたうえで、とにかくギリギリの限界まで押し込んでゆく。結局は敗けるということはわかっている、敗け方の問題というか、敗けることを通して次の局面を開くという考え方があった。

ブントの場合、当時の言葉でいえば「革命的敗北主義」ということ、革命的に敗北する」んだと。

だから常に闘争の結果については敗北の総括として行った。そしてその敗北をどう乗り越えるかという形で常に次の行動を設定していた。敗北をどう乗り越えるかというところで、つぎのエスカレータを計っていく。それで権力に肉迫していこうという展開のしかたをしてきた。

それが、68年秋の闘争で、一連の大衆闘争の展開としてはギリギリのところまで来たという直感があって、だから総括できなくなって、つぎは武装闘争しかないんじゃないかというのが芽生えはじめた。それで69年の4・28の沖縄闘争の時に、共産主義突撃隊というのを作った。これはRG（註11）といわれている最初の部隊で、今までの社学同（註12）なんかの、党派として組織している部隊の中で、特に別個にメンバー選りすぐって作った部隊。これが全体の戦闘の中でも特に突撃隊的な役割をになうということにした。これが、後に一時的なその日の行動だけに限るということではなく、組織的な部隊として定着させようという考えがでてくる基盤になった。

しかし我々としては、4・28の闘争は完全に向こう側の軍事的な力によって封じ込められたという受けとめかたがあって、それをどう突破してゆくのかということをめぐる、党内論争・党内闘争にダァーッと入っていく。出発点はだいたいみんな共通していて、分派を作ってどうしようという位置付けは持ってなかった。

それが、経緯はよく分からないが、革命論だとかなんだとかいう論争にまで発展して、一気に深刻化していく。

赤軍派の場合も当初から秋の前段階蜂起路線でフラクション（註13）ができていたわけじゃない。当初は、ブントをもう一回革命しなきゃいけないだとか、いろいろ話があった。

もうひとつ、4・28に共産主義突撃隊をつくるちょっと前から、軍事委員会を発足させている。東大闘争のあとぐらいからかな。

雪野 その任務は？

関 あんまりはっきりしないで、とにかく軍事のことが必要だと思った時に、軍事委員会をつくろうっていう感じ？

八木 そう。それともうひとつ、いろんなブツ（註14）の準備とかで、ある程度専門的に用意しなきゃいけないということが一つ、そして共産主義突撃隊はその軍事委員会の指導の下に組織されるという位置づけだった。当初はむしろいろんなブツの用意とかが中心だったと思う。赤軍派のフラクションの形成過程については、「赤軍総集編」という黒い表紙の本があるが、それに赤軍派の機関誌関係は一応全部収録されている。

具体的な作られていく過程はよく分からないが、上野（註15）の書いている文章によれば、4・28の沖縄闘争の頃には、ブントの政治局は解体状態だった。単一指導部という形態はなくなっていた。だからむしろ4・28の頃になると、政治局とかとは関係なしに4・28に向けた闘争委員会みたいなものが内部で作られた。68年11月までは関西から来ているメンバーが中心になって、それに荒（註16）だとかを含めて、ゆるやかな左派を作った。それに対して中大派（註17）といわれるヨッチャン（註18）とか味岡（註19）とか、あっち側のグループ、それと仏（註20）さんのグループというふうになった。こっちはゆるやかな大枠としての左派という形態だった。

ところが、秋には左派が行き詰まる。さっき言った展開ができなくなった。これで左派が分解する。特に関西から上京して来た部分

が、総括できないということで分解しちゃう。

それに対して荒なんか一方学対（註21）の指導で自信付けて、少々戦略戦術でブレてもそんなことではブレない党をつくらなければいけないと言い出した。そのために世界観をまずはっきり固めなければいけない、と。それは、当時の学生の気分をある程度代弁していた。社学同はそれまでずっと10・8から1年間バーッと、とにかく必死に前面に立ってやった。しかも大量逮捕・長期拘留が始まってくると、このままじゃもたない、やれないというのがあって、そういう学生気分をある意味で反映しながら、荒が、戦略戦術で少々ブレてもそれによってブレない党を作らなきゃいけない、そのためには世界観をまず固めなきゃいけないと言い出した。これが68年の11、12月頃。それで、学対はそれまで高原（註22）がやっていたのが荒に替わって、69年1月か3月かに、京都でいわゆる反帝全学連（註23）の大会を開く。その一方、左派が分解することによって、仏さんは非常に少数のグループだったんだけど彼が議長になる。一方で中大派のヨッチャンらの支持も受け、荒なんかの支持も受けて、議長になっていく。

仏さんが言ったのは、もっと階級関係ということをつまねなきゃいけないと。要するに関西系がムチャだ、ムチャクチャいっちゃうと。それに対する警戒感がバーッとあって、これじゃ組織がメチャメチャになるというので、その辺で荒みたいな考えがあり、ヨッチャンとこみたいな考えもあって、そして仏さんとこみたいな考えがあって全体として仏さんを議長にかついだという格好になった。そして関西から来ている部分はちょっとポ Шар という状況が半年ほど続く。

まあヨッチャンとこは、いわゆる大衆反乱論という流れで大体ずうっといく。

関西がムチャだという一番のきっかけは、10・21に防衛庁で火炎ビンを投げるかどうかという議論から始まっている。ところがそういう政治局だから、実際上の統率力はない。指導部としての指導性も権威性もなくなってきた。それで逆に内部でのフラク化（註24）の傾向が促進する。荒は荒で学対を押さえる。中大派は三多摩と中大を押さえる。仏さんとこは全体を抑えきれない、と。

関西から来た部分を中心としたメンバーは、むしろそのころはポ

シャッてしまってますと。そういう状況が続くんだけど、それが4・28闘争を前にしてこれじゃダメだというので、闘争委員会をつくる。この話は、1月か2月に共青（共産主義青年同盟）（註25）をつくって、都委員会とか、その青対（註26）とかの話の中で、闘争委員会を作ろうという話になった。4・28闘争時の指揮者はどのグループが出すか。そういう話もあった。今までは指揮者を出すのはある意味で名誉なことだったんだけど、その時期になると指揮者を出すということはパクられたら、長期間ナカ（獄中）に入るということだから、そうなるとすごく打撃になる。だから自分とこは出したくないという感じになっていた。

三戸部 69年の1月の東大闘争から大量逮捕、長期拘留というのが完全にスケジュール化された。

八木 ブントの側からいえば10月の防衛庁でパクられたのが大体翌年の5月か6月まで出てこない。その次の11・7でパクられたのがまた出てこない。だから、その頃から大量逮捕、長期拘留を踏まえて、闘争と組織を組み立てなきゃいけないというのがあった。それで逆に指揮者を出す出さないで、駆け引きがはじまったりするけど、とにかくこれじゃダメだというんで、4・28には政治局をアテにできないというので、ブントの中に4・28闘争委員会というのができる。そこでもう一回左派が復活してくる。その時には日向（荒）派はもう関係なく、別の左派という形になっている。大体関西からきているメンバーを中心に左派がそこでできてくる。そして軍事委員会、共産主義突撃隊、大体これを軸にして4・28闘争を牽引する。上野が共産主義突撃隊のキャップで、全体の総指揮という感じだった。

その後、党内論争に入っていく中で、4・28闘争の闘争委員会が一つのフラク化していく。上野の文章によれば、どうしてこういう風に集まったのかという問題意識、ここに意味を見出さなきゃいけないという話から始まって、4・28の闘争委員会をリードして、共産主義突撃隊、軍事委員会を作って闘ってきたということが、党内で他とちがうと。これが次のブントをもう一度作り直す時の中核とならざるをえない、またなるべきなんだというところから、赤軍派は始まっていく。

赤軍派という風に名称されたのは、自分から名乗ったわけではなくて、共産主義突撃隊の内部機関誌がたしか「赤軍」という名前だ

った。それで赤軍派といわれるようになった。(どっかで使った文章を向こう側＝仏にあつまっていたグループが分派、赤軍派と決めつけてきた)

「一向過渡期世界論」と「前段階武装蜂起」路線

八木 赤軍派の最初の機関誌「現代革命」(註27)というのは1、2、3と出て行くんだけど、1とか2は難しい話なんだよね。内容的には忘れちゃったけど。「現代革命」No.3あたり、つまり6月位から秋の方針というところに煮詰まって来て、そこで「前段階武装蜂起」というのを出す。68年秋の総括のところで武装闘争しかないという直感が芽生え始めていたんだけど、それは今まで「中央権力闘争」として展開してきたのを「武装闘争」へ転化させるということのことだから、これは「蜂起」であると。だからといってそこで一気に権力奪取というところに行くかということ、やっぱりそれは、臨時革命政府とか、閣僚名簿くらいつくるというのはあったけど……。むしろそこから本格的な革命戦争が始まるんだという、そういう転化を切り開く一つの節目という意味での蜂起であるということで、前段階武装蜂起と名付けられる。

そして、そういうことが可能な条件は国際性にあると。したがってこれは世界革命戦争の一環として始めて成立するんだという位置付けになっている。

三戸部 前段階武装蜂起というのはそういう意味でいうと戦略論というより戦術論だね。

八木 そう、もともとそれに先行して前段階決戦というのがあって、難しい話だけどそれは30年代のドイツがどうのこうのという話で、それはもっといえば、これも今から見ればおかしいんだけど、いわゆる恐慌革命論、戦争革命論というのがあって、マルクスは恐慌による革命、レーニンが戦争による革命だった。ところがロシア革命以降それは変わったんだと。例えば第二次大戦の時をみれば、戦争の前に決戦が訪れる。それはファシズムの台頭であると。だから、「プロ独(註28)かファシズムか」という決戦が、戦争の前段階にあるんだというのが前段階決戦論だった。

三戸部 何で「前段階」?

八木 それは、戦争ということを前提にしているから。

なぜ戦争を前提にしているか。要するに「帝国主義論」(註29)で市場再分割戦(註30)が行われ、その対立は不可避に帝国主義戦争(註31)にいくという話でしょう。ところが、戦争にいくんだけど、戦争を内乱に転化するというんじゃないんだと。戦争にいくんだけど、その前にむしろ階級情勢としては一つの決戦的なブルジョアジーとプロレタリアートとの対立が煮詰まるんだと。そのままバアッと戦争に行くことはないんだと。向こうが戦争に行くにはファシズムによる制圧を通じてなんだと。それはもう早い時期からそういう議論はあった。それに対して、こちらむしろ攻撃型階級闘争で、いわゆる労働者国家(註32)、根拠地国家(註33)の生存をテコにして、むしろプロレタリアートは国際的に攻勢をかけてゆくと。プロレタリアートは国際的に攻勢をかけてゆくから、それと結び付いた一環としての日本の闘争によって、逆に向こうを追いつめながらファシズムを引き出してくる。それを打ち破って革命が勝利すると、だいたいそういう考えだった。

三戸部 なるほどね、そうすると特に67、8、9年のヴェトナム情勢(註34)にもものすごく規定されている。

八木 そうそう。「一向過渡期世界論」(註35)というのが出る。68年の1月に「我々の立脚すべき地平」というのが。

もともと関西派の中でも傾向的に分岐したのがあって、とりわけエンブラ闘争で大きくなる。その一方で田原芳(註36)なんかが言ったように、帝国主義が攻勢をかけて排外主義がワアーと対応してくる、それに対してそういう帝国主義の侵略・抑圧・反革命と闘って、排外主義と闘って、というのが闘争の基調だという意見があった。最初の頃はそれが支配的だった。それに対して、ヴェトナム情勢の展開、そしてエンブラ闘争なんかとのからみで、国際的な反米闘争等のたかまりがあって、それは労働者国家と民族解放闘争の結びつきでの国際的な攻勢があって、それらと結び付いて帝国主義の場合も順序があって、最初は侵略・抑圧・反革命と言っていたのが、むしろ反革命が先ずあり、それを通じて侵略・抑圧がなされていくんだと。だからこの反革命に対して、反革命反対という民主主義的な闘争が起こるんだと。その反革命反対というのを革命へ転化するとい

う攻撃的な闘争が可能だし、またしなけりゃいけないと。それで追い詰めていく。追い詰めることで逆にファシズムなりなんなりが引き出されてくる。それをこっちの側がもう一回それに打ち勝って飛躍していくと。それが後に「攻防の弁証法」という話になっていく。

世界革命の第三の道

三戸部 68年のブントに焦点を合わせると、それ以前の65、6年の日韓闘争（註37）、都学連（註38）ないし再建三派全学連（註39）の運動は、ほとんど第一次ブント（註40）の色合でやって来ていた。ところが67、8年には完全に各党派みんな国際情勢で60年代に独自の、第一次ブントと離れた色合を強めている状況がはっきりする。

八木 そう、我々もとにかく日韓闘争までは60年安保闘争（註41）、三池闘争（註42）の総括から始まって、第一次ブント解体の分派闘争の総括（註43）、そして実際の闘争を展開する時には、とにかく60年安保で国会突入まで行った、と。あそこまでどう接近するのか、あれを目指し、あれを乗り越えるという目標があった。だいたい60年代中期迄は、60年安保闘争というのが常に頭にこびりついていて。三戸部 結局日韓闘争から66、7年迄、第一次ブントの「プロ通」、「革通」、「戦旗」（註44）などのグループ分けを新左翼諸潮流も持っていたと思う、母斑として。おそらくこの68年の段階は、味岡にしてもヨッチャンにしても、当時の第二次ブント内部を考えても他の党派もたぶん同じなんだろうけど、ほとんど第一次ブントの影響を受けない第二世代に移っているんだな。これが65、6年からの際立った特色だな。革命左派の人たちもそうだけど、僕らML派（註45）も、毛沢東派の公然たる潮流。新左翼運動全体で言えば、反スタ主義（註46）をいわば最大限の公約数としてみんな持っていたわけだけど、その中でいわば毛沢東派みたいなかたちの登場は、当時の常識では考えられない状況だった、66年の段階で毛沢東を支持するなんて言うことは。それはひとつはプロ文革（註47）の影響であり、他方キューバ、とくに日本・キューバ友好協会にひかれていく部分がある。それがチェ・ゲバラ、フィデル・カストロ、レジス・ドブレ（註48）なんかの一連の中南米の運動の流れで出てくる。もうひとつは、カル

チェ・ラタン（註49）を中心とするフランスの五月革命（註50）、それに呼応したアメリカの学生運動、ブラック・パンサー（註51）、ウェザーマン（註52）なんていう運動が出てきた。

ウェザーマンは69年だけどその前のSDS（註53）、黒人の学生組織ではSNCC（註54）。

そういう形でどの党派もみんな国際的な色合でもって、それまでの運動をみんな剽窃している。その意味で第一次ブントから相対的に独自化された色合が、青年運動潮流の中で強まってきたのが68年。八木 ただ塩見の書いた「一向過渡期世界論」の中では、それと結び付いて「ゲバラ、カストロ路線と我々の道」というのがある。世界革命の第三の潮流（註55）の中で、毛沢東については「適切なプラグマチズムだ」と評価している。我々としてはむしろゲバラ、カストロ路線に近い、要するにOLAS（註56）に近い。これが世界革命の第三の道なんだという位置付けをやっている。

三戸部 あの頃、松田政雄（註57）の「世界革命運動情報」というのがあって、あれが中南米の運動の紹介には随分役に立っていた。それから、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ（AALA）研なんてのがあって、相当文献を出してきて、まだ本になる前のゲバラの言葉で「第二第三のヴェトナムを」。あれがものすごい影響を与えているんですよ、それが67年。そして10・8の闘争が、想像以上に、当時の国際情勢から規定されていて、日本の学生運動も一挙に国際化していく、世界的な評価で言えば。その辺が根拠地とか、ナントカ論、いろいろのもう一方の下地になっている。

八木 理論的な意識としては、68年の8月に国際反戦集会というのをやって、ここにはアメリカのSDSとか、西ドイツのSDS（註58）も来ているし、ブラックパンサー、フランスのインター系（註59）が来て、それで国際集会やって、その時にブントが出している8・3論文は、世界党、世界赤軍、世界反帝統一戦線（註60）という形で国際的に連帯していくという、そういう感じだった。

赤軍派の場合で言えば第一次ブントの総括に、心のどこかでこだわりを持っていたのは、塩見と俺の二人ぐらいだな。だから塩見が書くと、党の問題の話になると急にどこかで第一次ブントの三分解の話が出てきて、ついにこの三分解が止揚できるかという話になって、他の者は「なんやこれ？」という反応だった。

三戸部 塩見はそういう意味で第一次ブントの化石なんだよ。ぼくらの組織で言えば佐竹（註61）が、この時期に一気にいなくなる。こういう状況の背景を考えると、例えば河北（註62）もようやく依拠するものを中国に、毛沢東思想に見つける。

八木 塩見はある意味で第一次ブントの化石という面があるのも否定できないけれども、しかし彼がブントの中では、初めて第一次ブントを越えた。ちがう方向性を創った。それが「一向過渡期世界論」。これで始めて第二次ブントとしての根拠ができた。それが一定の現実性を持ったのは、明らかにヴェトナム戦争とOLASなんだよね。

三戸部 現実性を持ったように錯覚した？

八木 単なる理論上の作り事としてではなく、運動の武器と受けとめられるということで。日韓闘争の後もそうだけど、確かに学生運動なんか、もう一回盛り上がり始めてはいるけれども、国内全体で見ればまだ圧倒的に少数派で、権力にはやられるわ、代々木には叩かれるわ、なんかもう必死に頑張ってますという感じ。その時にパッと世界に目を移せば、ウワァーッ、こういう国際的な運動と一緒にやっているんだ、と。

赤軍派フラクションの形成

三戸部 妙に現実的に見えて、これでいけるという思いがあった。特に68年8・3は、国内的な学生運動の要因では、66年暮れに再建された三派全学連が、67年10・8の総括をめぐって中核と反帝全学連に割れて、統一組織がなくなっていく。反帝全学連も更に青解（註63）とブントとに割れて、それぞれが一方は書記長だけ決め、他の一方は副委員長だけ決める。総体として人事はようやく一本的に見えるという状況になっていた。

八木 三派全学連をああいいう風に党派的に分解、寸断したのは中核派だよね？ 赤軍派の中では後に、「反スタ」ということ自体がおかしいんじゃないかというのが、出始めていた。

三戸部 ML派の場合は、66年に東京学生会館闘争があって、東学館がなくなって、明治の学生会館にたむろするようになった。そし

て67年の冬の善隣会館が、代々木との党派闘争で、善隣会館にワァーッと出ていった。みんな血に飢えていたから。その頃66、7年というと、文革が大幅深化してきている。66年に毛沢東の話をした時には、圧倒的に少数も少数、笑われたからね。あの頃から「反スタ」なんていう意識が実態的になくなってきている。反帝反スタ（註64）がもったのは60年代前半。俺らの頃、もうなかった。

八木 いや、ブントの中ではあった。早稻田を中心に革マル派（註65）との党派闘争をやっていた。これをやっていた所はみんなそういう意識が強かった。

森 でも68、9年になると、ブント内部ではほとんど問題になっていなかったんじゃない？

八木 そんなことないよ。日向の「理論戦線」（註66）8号だとか、あそこを中心にしてあったじゃん。日向の「理論戦線」でいっている内容は、要するに黒田寛一と宇野弘蔵とあと吉本隆明と藤本進治と廣松渉あたり、学習文献でドオーンと出てくる。

そしてちょうど「前段階武装蜂起」ということを掲げた時から、赤軍派フラクションに対する位置付けも変わってきていると思う。上野の文章の中にちょっと出てくるけど、こういう位置付けだった。要するにブントを統一戦線と見る。自分ら赤軍派が党であると。いって見れば自分達が上位に立っていて、自分らの決定の方が優先するんだ。もっといえばブントには拘束されないと。

三戸部 統一戦線党的な、ブント党形成論があったんじゃない？

雪野 綱領とか理論よりも行動で統一を、と。

三戸部 各グループがあってその色合をまとめることができないから、みんないいじゃないかっていう。

森 それは逆で、統一戦線的な党形成を否定するという立場に立っていたと思う。現実と乖離するかもわからないけれど。

八木 マル戦（註67）との最初の合同はそう。これは明らかに、統一戦線から党をつくることをはっきり意識していた。これは連合党であると。なぜあえて連合党を今云々するかといえば、都学連再建から三派全学連を形成していく、このために連合党でいくんだ。出発するんだ、と。

三戸部 そうだよ。多数派形成としての党的連合、党的統一戦線という指向は一方にあったと思う。そういう指向は味噌とかヨッチ

ちゃんなんかみんな含めて結構持っていたんじゃないの。

八木 だから68年秋位からは逆にそういう連合を変えていかなければいけないと、むしろ否定する。しかし、頭の中で否定しつつも、実態的には連合化を促進するというか、各フラクションの連合という性格はむしろ強まる。だからわかりかしすっきりひとつにまとまっていた時期という、7回大会、68年3月からその秋の10・21まで。その時期にはいわゆる、ゆるやかな左派が圧倒的な主流だから。

三戸部 常にブントには大ブント構想というのがある。そういう傾向はずうっとあるよね。

八木 ささやかに。そして、むしろ積極的に、今のブントは統一戦線であり、自分らが党である。だから自分らが党としてこの統一戦線のブントを作りかえるんだ、そういう位置付けに変わっていている。そして破防法。だからその頃になると、政治局はみんな各々勝手に潜っちゃって出てこない。

三戸部 そこも教えてもらいたい。潜るというのはどういう状況でみんななっていたのかな？ 僕なんかも東大闘争で捕まって、出てきたら指導部はみんな潜っているというわけだけど、俺なんかからいえば潜るような実感全然ないんだよね。あの状況では。

八木 結局4・28の直前に破防法が適用される。本多（註68）がパクられて、あと何人かに逮捕状が出る。それまでは、例えばブントだったら指導部というのは、戦旗社が神田三崎町にあって、そこに政治局はしょっちゅう出入りしていた。いつもそこへ連絡とって、そこで集まって。毎日かあるいは二日に一遍は顔出して。だから破防法で本多がパクられて、あと何人かに令状が出ているというのがわかった途端に、戦旗社（註69）によりつかなくなる。じゃ、どこにいるのかというと、各々のフラク化がかなりすすんでいるから、そこに行っちゃう。中大派は中大にたてこもる。赤軍派は医科歯科大（註70）にたてこもる。たてこもるところがないところは、どこかに潜る。

三戸部 医科歯科大が赤軍というのは？

八木 4・28闘争の時に医科歯科大にたてこもって、それ以降大体あそこを陣取った。大学病院には病人がいるから、権力はいれないというのがあった。

森 その代わり病院の方から、静かにしてくれなんて言われて。

八木 4・28の時はあそこから出撃して、またそれが成功して。

雪野 その流れで言うと、川島豪（註71）が、組織は潰れてもとにかく一発やればあとに残っていくんだという論理だとか、12・18の後の火炎ビン玉砕の方針とまったく通じている。ただその中で実際にやっている連中は、それじゃもたないということでワッと反発が出てくる。その感覚で言うと、そういう革命的敗北主義というのはかなり異質なものであったんじゃないかな。

八木 レーニンが言うところの「革命的祖国敗北主義」とは意味が全然違う所で使っている。敗北を越えて挑戦する。敗けかたの問題だということ。

森 敗けることによってじゃない。闘うことによって状況を切り開くんだが、そのためにその局面で敗けたってしゃあないじゃないか。最終的に勝てばいいと。

八木 むしろギリギリのところをやって敗けなきゃいけない。このへんでやって敗けるのはダメ。勝ってもダメ。今やれるとこのギリギリをやって、そこで敗けなきゃいけない。

学園闘争と労働運動に対する位置づけ

三戸部 例えばそういう党形成の問題と、大衆運動局面、例えば組合で賃金闘争やったとして、そう言うのはその論理で繋ぐとどうなる？

八木 だから学園闘争がそうなる。そこでもめる。組合の方は力を持ってやっている所はあんまりなかったけれど、学園闘争はそうじゃない。ふつう学園闘争は、ある種のボス交（註72）含めてある協定が成立して、それで集約されていく。そういうパターンがあって、常に当局に顔の効くのがいて、話がついていく。そう言うのはダメで、とことんやって敗北しなきゃいけない。それは、やっぱり学園闘争としてはできない。だから、そこに政治闘争を持ち込んで、学園闘争はある程度集約しつつも政治闘争に転化しながら徹底化させていく。

前澤 そういふのに対して反発は？

八木 中大はいろいろもめたと思う。

三戸部 68年2月の授業料値上げ白紙撤回闘争、67年に明治の学費

闘争を例の2・2協定(註73)で潰しちゃってて、ブントとしてはもう妥協を選択できなくなった。ブントの体質としては学園闘争は常に各大学独自のボス交路線。それは悪いことだと思ってないけど、あの時、徹底して闘って68年のエンブラをやった余勢でワーッと跳ねて、学校は白紙撤回すると言ったけどバリケードは解かないということで、大混乱した。

八木 とにかくギリギリまでやって、敗北するまで終わらない。逆に学費闘争一本でそれをやるとどうしても無理がくる。だから政治闘争を持ち込んでそこで徹底化させていく。政治闘争でいけば妥協とかボス交はない。

村井 学園闘争で活動家パクってくるだけ。あとはどうでもいいって感じもあるでしょ？

三戸部 もうひとつはレーニンの外部注入論(註74)、自然発生性に拝跪してはならないというので、外部注入論で、政治闘争をとというのが出てくる。僕は、権力というものないしは権力闘争や政治闘争は何を称して言うのか、今だに出ていないと思う。

森 あの頃やっていたのは文英堂闘争(註75)くらいか。京大の入試闘争の時に何もしないでわざとパクられて、要するに一人で身動きとれなかったから、クビになってそれから解雇撤回でやる。かなり個人プレー的ではあるけど。だから、総体として労働運動に対しての方針はでていなかった。

八木 あと、当時関西でやったのは塩水港闘争(註76)、工場占拠して、という。

三戸部 あの頃の労働運動の状況もちゃんと見ておいた方がいいと思う。一般的には当時の新左翼路線は、大企業における反乱はどこもできなくて、本来ならば小さな零細資本家なんか全部こちらに組みこまなければいけないのに、勢いのいい活動家が行って、一人いれば大体騒ぎは起きる。そして手当たり次第に火を点けて歩いた。

八木 大企業は反乱云々と言うよりまだ組織戦だった。関東では中核派なんか大分組織していたと思う。関西では、ブントは大体、電通(註77)が中心だった。中核は松下電気が中心だった。ただブントの場合、最初は民同(註78)にくっついていて。民同は日共(註79)との対抗関係で利用しようという腹だった。我々も、じゃ利用されますと。利用されつつこっちを増やしましょうという感覚だった。急

進的な闘いは外で、反戦でやる。中では、労研とか組合青年部とかで。69年6・15の御堂筋デモの時には、たとえば反戦の部隊がいて、こっちも結構電通の連中が先頭にいる。そのすぐ後に電通の組合部隊がいて、その前を青年部とかが全部赤ヘルで固めて、結構格好いいとこまでいっていた。

ところが68年末ごろ、10・21以降から、それまでは民同が日共との関係で利用する態度だったのが、関係が変わる。攻撃するようになる。日共とか協会も今まで無視していたのが攻撃し始めた。公社も今まで相手にしていなかったのに、1年なり2年なりかけて解体するという方針を立てて外堀から埋めてくる、追放するという姿勢。それにブントは対応できなかった。対置したのは要するにマッセンスト。結局最後になったらはんの少数で、大阪中電(註80)でタレ幕垂らして、それでクビになって、ということになった。

三戸部 京浜安保共闘(註81)ないし革命左派は、反戦青年委員会(註82)に対してどういう態度をとっていた？

雪野 直接の接点はあまりなかった。我々革左の前身は独自の影響をもっていた所でシコシコやって、県立川崎高校(定時制)(註83)などを通じて拡げていく。三国工業(註84)みたいにフラクのあった工場が三つか四つあって、そこでやっていることは反戦団(註85)の学習会をやったり、4・28だとかのデモにも行く、帽子(ヘルメット)を被って。そちらなんかとちがって主体的に準備するわけじゃないけど、要するに付和随行する。

八木 反戦青年委員会はエンブラ闘争の後急に拡大する。それは凄かった。

三戸部 エンブラに参加したのは？

雪野 吉野雅邦と渡辺正則、金子みちよさんも。

三戸部 おもしろかったのは、新宿駅でヘルメットをこう持っていると相手が寄ってきて、カンパがバラバラ札で入ってくる。金が入って入ってしょうがなかった。一言もしゃべる必要がない。

八木 60年安保の樺美智子の時以来の出来事だった。それで例えばどこか一つの地区にこっちのメンバーが二人いるとする。二人いればそこへ応援に行行ってワァーッと集会やる。ビラ播いて、ステッカー貼って、映画とかなんとか。それで2、30人は集まる。こっちから十数人動員して行って集まって、それでその場で反戦青年委員

会を結成しちゃう。

三戸部 エンプラ闘争と、日本の代々木を中心にずーっとあった平和運動の系譜、関連がある。下地を作ってきたと思う。

雪野 反戦団が組織されるのもたしかその頃。もうちょっと後かな？

八木 当時の労働運動で言えば、65年頃から、今の全民労連（註86）の中心になっているいわゆるIMF・JC（註87）、金属労協（註88）が台頭する。あれに大手から中堅企業あたりは大体分裂させられて、それまで第一組合だったのが少数組合に転落する。だから旧来の総評の良心的な活動家は茫然自失。自信無くして。他方で日共と公明党がバアーっと伸びる。高度成長に対応して、一定の力を背景にその利益を獲得しなきゃいけないという、いわゆる福祉国家路線で組織して伸びる。そういう意味では70年代は、田中角栄型の福祉国家か日共流の福祉国家かという、改良の競いあいから伸びていく。それ以外の部分はどうするのかというので、特に若い連中が反戦青年委員会にワアーっときた。だから最初はそれは少数だし、みんな外でやっているし、こちらも今すぐ中でできない。だから先ず地域で一つの力を作らなきゃいけない、それも政治勢力として。それを背景にしてそれぞれ中で行動していくという位置付けだった。実際そういう方向でいき始めて反戦青年委員会とかでやっている関係で、解雇撤回闘争やったり、あるいは組合の方で合理化問題で反合理化闘争起こってきたり、それと結び付けたりして地域労働運動とか言ってやっていた。そういう風にそれなりに力がついて一定の力を持ち始める。そうすると一斉に叩かれ始めた。資本の側からも、民同とか日共の側からも。

そこでは、労働運動での活動、指導という点では、旧来のままではできないとなった。むしろ本格的に対峙し合う段階に來始めているから、そういう形での組織の作り方も活動も再編しなきゃいけないというのはあった。

三戸部 結局60年の三池闘争というか、炭労（註89）、国労（註90）、日教組に対する再編が進んで来て、60年迄の一定の敵の体制の整備がある。60年の安保闘争で政治的にもあらゆる形での動揺があって、それに対する再編体制としてヘゲモニー争い（註91）があった。水面下で進行していたのは敵サンの方がガッチリやっていて、今指摘の

あったIMF・JC宮田一派（註92）による階級政策として労働者の直接的な囲い込み、ないしは労働者だけじゃなくて国民、人民の直接的な集約が進行していたときに、運動の側は国際的な状況の中で、敵の水面下での進行に対して、こっちが表面に出ている間に肝腎な所は全部足を掬われていた。気づいて見たら学生だけが最後のアダ花ストリップの時期だったのかという認識はどうなんだろう？ 60年から70年にかけて……。

八木 アダ花かどうかは結果論だと思う。新左翼にとってはもともと学生がほとんどだったから仕方ないけど、労働運動の中へ一定の足掛かりを作りはじめていた。ところが、そう作ってきた所でそれからもう一度本格的な構築のためにどうすべきかという問題が起こった時、問われた時、そこから召還した。

三戸部 水面下で人民の直接的な集約を敵がやってくる時にそこに包摂しきれない部分、不平不満分子を、青年運動が逆に吸い上げた。我々が水面下の方へ入り込んで行ったわけじゃなくて、むしろそこから弾き出された人たちが我々の所へ不平不満分子として入ってきて、一つの層の運動が展開されたと見たらどう？

八木 そりゃ、まず不満を持った部分が集まってくるけど、その部分が向こう側からみてただ役に立たない落ちこぼれなのかというと、そうじゃない。結構優秀な労働者が多い。実際、現場でも向こうから重宝がられるような第一線の連中もいる。その反面、落ちこぼれてくる分子もいる。だから当時でも、我々はそうして弾き出されて落ちこぼれてくる不満分子に足をおいてそこを組織するのか、それとも一番勝れた方になんとか食い込んで行くという風に立てるべきなのかという議論も、一度やったことがある。いわゆる政治性とイデオロギー性でも、ビシッとしていくのはむしろこっちなんだよね。こっちで分岐してくる部分、この中で獲得していく部分、そしてそれが一番精鋭になっていく。それが精鋭になりつつ、いわば弾き出されて落ちこぼれた不平不満分子がそのまわりに指導されてワアーっとなるという感じだったと思う。

左翼運動の後退・社会主義の陥没

三戸部 僕の課題意識から言うと、70年代から80年代にかけてかなり揺るぎない支配秩序、秩序意識を敵は築いた。その分岐点は一体どこにあったのか。確かに前澤の言うように鏢競り合いは60年代の末から70年代にあったと思う。その分岐がどこで行なわれ、我々はどこに楔の打ちかたが足りなかったのか。どこを見落としていたのか？

今の教育改革から行政改革から、もう、やりたい放題でしょ。まさに帝国主義的再編、いや帝国主義の体系そのもの、人民を直接集約する体系ができちゃったわけだよ。これは一体どこが分岐だったのか。

その重要なインパクションに連赤は絶対なっている。だけど連赤が全責任を負うわけじゃなくて、むしろ連赤はそういう政治力のなさとして、僕らがもし弁護するとすればそこに一番素直に課題に答えようとして潰されていったと見たほうがいい。

前澤 基本的にはアメリカがヴェトナムから撤退して日本がほぼ一人前の帝国主義になる。内実はともかく世界の繁栄国になっていって、海外への企業進出がはじまってと言うのが一番の背景。お互いの政治力の問題を抜きにすれば。一言で言えば日本が豊かになった。

八木 細かく検討して見ると、向こう側の作り方も二つの時期に分かれていると思う。60年代半ばから70年代初め迄の時期と、70年代後半からの次の時期と。実際に豊かになってジャパンアズナンバーワン（註93）とか言っているのは、むしろ80年前後。豊かな、いわゆる中流意識がヴァーッととなっているのは70年代後半。

三戸部 まだ10年経っていないくらい。

八木 オイルショックがあって、そのあと世界に先駆けて減量合理化とか日本の経営とかやって、それでよその国が浮上できないから一気にグアーとなったのは、78年頃からでしょ。アメリカとかイギリスも浮上できないで、一時的に立ち直ったけどまたダメになって……。ところが日本はどんどん輸出攻勢して席卷して、世界に

名立たる日本的経営なんて言われ出したのは70年代の末ごろから。
佐藤 80年初めにはイタリアがそれをまねしている。オイルショックが73年。第一次の総括で、日本だけが伸びた。なんのことはない、コストの問題として。

八木 60年代半ばから70年代の初めくらい迄は、揺るぎない体制といってもまだ全般的なものじゃなかった。向こうは重点的に絞っていた。さっき言っていたやりたい放題となるとこの何年かでしょう。その転換点は70年より前のはずだけどそれがいつどうなったのか……？

三戸部 そうだ。その時点をおれらの運動との関連で特定しておかないと、今後何も見えてこない。

森 要するにIMF・JCで宮田あたりが、例の春闘潰しをやってくる、あの辺に端を発してるんじゃない？ あれで闘わない春闘の相場を作って企業の別動隊になっていく。

佐藤 俺が組合活動やり始めた時はもう潰されていて、全通（宝木体制）（註94）も危ない時期。

三戸部 国際的状况からいくと、今の世界構造の基本は東西じゃなくて南北だと思う。例えば南アフリカの問題とかイスラエルの問題とか、こういう問題を考えていくと、かつてのプロレタリア国際派は、本来なら今こそ最も有効性をもった運動、権力を握るかどうかは別にして世界構造に対するプロテストの主体としてでも、とにかく意味を持つとすればそこしかないだろう。

八木 ヨーロッパなんか市民運動でもそういうのがある。

三戸部 にもかかわらず日本でどうして持てないのか。そのへんのところで俺らのかつてやってきた国際主義急進主義運動の欠陥はどこにあったのか。本来今のエスタブリッシュメント、人的に考えるより秩序意識という意味で、それに対する我々の反乱なりプロテストと考えた場合、なぜ今有効性を持てないのか。本来ブント風に言えば、全世界を獲得するための戦略だった。それが今一番普及されている時に、全世界を獲得できない。

雪野 その点で言えば、国際的な図式でアジア、中南米、ヴェトナム、フランス、アメリカなどがこうなった時期と、さっきの時期区分で言えば第一期が確立したあと位になるけれど、ヴェトナムがカンボジアに侵攻して、それから中越戦争（註95）が勃発する。（76、

7年) またその一方、中国派の立場で言うと、中国内で〇小平の文革見直しとなってくる時期(78年)がある。それはやっぱり国際的な枠組みとしては、急に世界が見えて自分達の戦略も世界から見れば我々は少数派でないと見ていたような時期に対比すれば、まさに陥没した。

八木 そういう意味で社会主義はやっぱり地に落ちたんだ。

三戸部 逆に言うと連赤の事件が仇花だったのも全世界的なそういう動向と無縁じゃなかった。

前澤 中南米のゲリラもほぼ我々よりちょっとあとくらいにバタバタと潰れていく。でも今また逆に復活している。

三戸部 だから課題を先走りして言えば、連赤の総括をキチっとやれば、それなりの有効性を持った存在にはなり得る。連赤はやっぱりもの凄い負のインパクトを日本の運動に与えている。左翼に対する徹底した不信感を植え付けたのは間違いない。それだけに、日本ではこういう形をとって潰れていったけど、全世界的にみて70年代は、連赤が72年、4人組の76、7、8年位まで、それから中越の対立と、そういう形で状況を押さえていくと、社会主義陣営が持っていた課題、ないしは歴史的に社会主義という思想が出て来て、その時代的な転換点として置かれていた位置をもうちょっと出したほうがいい。

雪野 あのこと共産主義者っていうのははっきり思想的にヴィヴィッドな存在感があった。今、社会主義とか共産主義というものの自体が……?

森 プロ文革であれキューバ、ヴェトナムであれ、それなりにこちらがモデルとして提起できるものがあった。それが全部バタバタと潰れている。じゃ今度俺達が社会主義、共産主義っていう時に、やっぱり答え切れない。ヴィジョンを出しきれない。

八木 以前は、人をオルグ(註96)する時に、デモに行こうとか、集会で今こうだからやんなきゃいけないという話もするけど、思想的政治的にオルグできた。世界を語り、思想を語って人をオルグできた。だから優秀なメンバーもきた。ところが今は誰も思想で人をオルグできない。

森 人が集まらなくなっているんじゃない。来る所には来る。何をやるかの問題。

三戸部 おもしろきゃ行くもんな。不平不満分子はいっぱいいるし。そういう時代だよ。

八木 組合運動一つとっても、以前は運動やりつつ同時に思想や政治を語って、それで人をオルグした。今、組合運動の中でそういうオルグをしている人は誰もいない。そういう事は一切言わない。

雪野 それこそ組合官僚のルーチンワークがあって、それ自体エスタブリッシュメントになっているけど、それだけしか残ってないでしょ。

八木 そんなにビッグユニオン(註97)じゃなくて、そのへんの中小的企業、例えば全国一般神奈川なんか争議とかしょっちゅうやっている。そこに、元の新左翼の連中がドオーっと入ったりしている。そういう所でも思想的あるいは政治的な事は、誰も一言も言わない。酒飲んで、どこ攻めて、明日どうしてとか、そういう話しかやらない。

雪野 八木さんの人集めのテーマが変わって来ちゃっている?

森 今、全民労協(註98)とか全民労連とか連合の流れの中で、棹さしてる部分もいくらもあるし、特に国労内なんか、行かない部分を組織しよう、そしてそれをナショナルセンターとして機能させようという、そういう動きがある。

雪野 さっき、人が集まらなくなったわけじゃない、集まる所が変わったんだと言ったけど、要するに昔、僕達がやってたようなパターンで人を集めようとしても集まらない。今、大状況じゃない所で人は集めている。我々過去向きには大状況なんで、こういう形で集まっているのは本当に希だと思うけど。

森 労働運動にしても、ワクを決めるんじゃないで面白く出てこれるとか、自分もその中の主役。組織するという観点からはちょっと違うけど、そういう形での面白い連中はけっこう出ている。ただ東京を見るとそういう運動体も運動形態もない。最初にワク作っちゃって、このワクにはめ込んでみたい運動がずーっと主だったから、僕なんかこっち来るといろんな運動の場面に出ても、なんか堅い。ギスギスしている。だから次に出たくなる。

三戸部 いろんな世界構造考えて見ると、スターリン(註99)の経済学教科書(註100)にある全般的危機説、要するに社会主義のマーケットと帝国主義のマーケットと二つあって、社会主義が増えていけば

世界の資本主義のマーケットはどんどん小さくなるから、資本主義は常に全般的危機にさらされているんだという有名なテーゼがある。

最近わかってきたのは、どうも帝国主義のマーケットが社会主義のマーケットを完全に呑み込んだ。それははっきりした。そういう意味での帝国主義者の野望と野心と精力的な活動には勝てなかった。歴史時代的にそれははっきりした。今や社会主義のリーダーシップを取っている東独やソヴィエトは、社会主義の中で南北問題を起こしている。そういう構造になって、世界はグローバルに一つの市場しかないんだというのが証明されてしまっている段階だと思う。

八木 だからそういう事を論拠にして、一国社会主義はダメだ、世界革命だと言ったわけだね。

社会的視点のない運動

三戸部 日本でもおそらく人種問題とりわけ南アフリカ問題を扱うと、これは日本のブルジョアジーのアキレス腱なんです。今南ア貿易、世界で日本が一番多いでしょう。そういう構造を睨んだ運動体をキチッと組織していく、社会主義や全体の流れをみて、その辺の所を連赤とのからみで整理して、時代というものを浮き彫りするのに役立てれば面白い。

森 確かに今、日本が世界で、貿易が伸びているとか技術革新が進んでいるのは、要するにLSIとかコンピュータ関係が伸びているから。あれは南アで生産されるレアメタルを使っている。だから、南ア制裁決議しながらも、日本にしろアメリカにしろ切れないわけ。レアメタルがなくなったらコンピュータ産業成り立たないから。

八木 60年代の運動で、こういう言い方が適切かどうか分からないけど、いわゆる社会的な観点はなかった。要するに国家権力と我々という、その観点はあったけど。

森 どう組織していくかという組織戦略みたいなものは全然なかった。

八木 そういう意味では、確かに経済情勢とか情勢分析はやるけれども、いわゆる社会構造とか社会的な諸関係がどうで、それをど

う変革しようとしているかとか、そういう観点は全然なかった。だから、逆に党＝共產主義の母胎論、要するに社会生活の全問題を党の内部に全部抱え込んでそこで解決しようなんていうのが起こってくる。

雪野 というよりも、我々にはそれまで社会生活がなかったわけだから……。

三戸部 俺の観点からいうと、例えば今財テクブームだと世を挙げて言われるわけだけど、財テクの事について例えば左翼の論文を読めば、拝金趣味とか金権主義批判としては出てくる。でも財テクの事について大マジメに研究したものは何も出てこない。

だから南北問題を基調に置いたタイムラグによる収奪、それから例えば南アのアパルトヘイト（註101）に対する反対闘争、あのへんをキチッとやっていくと、おそらく日本・世界の帝国主義の構造によって最もアキレス腱をつく事になる。

そういう視点到置き換えなければ多分これからの運動の有効性は出てこないだろう。そういう視点を基点にして考えていくと、かつてブントも、ほとんどの新左翼の党派も、67年の10・8を一つはプロレタリア国際主義（註102）の分水嶺といい、一つは実力闘争の分水嶺と表現した、そのプロレタリア国際主義が今こそ最も有効性を持って世界をとらえられるのにもかかわらず、なぜ我々の国際主義はそこをとらえることができないのか？

八木 それは、国際主義を一側面からしかとらえてなかったんだよ。国際的な社会的構造とか、国際的な諸関係で押さえていくと言うよりも、それが運動としてどれだけ帝国主義の暴力に対して革命的暴力として出現して、ドンパチやってるかという、そういう見方で、国際主義を見ていた、その側面でしか見ていなかった。組織された暴力という角度からしか、国際主義ということを押さえ切れてなかった。

雪野 そうだね。結局ドンパチというかたちでないと我々の目に入らなかった。今でもその形で言えばフィリピンだとか、ああいう所の運動に対する連帯をやってる連中はいるし、それを売り物にする党派もいる。

八木 ヨーロッパで起こっている第三世界と連帯する市民運動は、要するに行政から金出させて、第3世界に対する政府レベルとはまっ

たく違う援助センターを作って、政府レベルだったら実際には開発で破壊していくけど、むしろそこに生きているものが自立していけるように、そのために何が必要とされているかという角度から、それに応じて援助し、そして商業レベルで輸入されているものは安いけど、現地で作っているものを高い価格で買って、それを国内のみんなが分担して買うとか。そういうのを最近では行政まで巻き込んでやっている。

三戸部 さっき八木が指摘した社会的諸関係に関する視点の弱さ、これは、連赤なんかに端的に現われている。こんなのは諸関係に対する視点なんて言うよりも、生活の知恵がまるでない。

雪野 例えば坂口弘の生活といったら、千葉で生まれて、大学に入って、そこにたまたま川島豪がいて、その子分になって、1年か2年働いてそこで前澤をオルグしてきたけど、それだけでしょ。しかもその間だって活動家でやっていたわけで、普通の社会生活をやっていたわけじゃないんだから。

村井 唯一の社会的経験が、和歌山のどこかの漁協へ中島衡平さんなんかと一緒に夏休みにバイトに行く。沿岸漁業を救うのは我々だと思って増殖科にはいって。そこであまりの賃金の安さに怒って他の労働者と話をしたら、自分達よりもっと安いおじさんたちがいる。それに衝撃を受けて1週間で帰って来ちゃう。これじゃダメだって思って俄然突っ込んで行くわけですよ。

森 革命左派は当時としてはどちらかと言えば「労働者、労働者」と言っていた。ブントとか全共闘は学生運動で……。

三戸部 実態的には、三国工業の部分なんか知らないけど幹部から何から全部学生運動出身だ。だいたい働いたことのない奴が圧倒的。それで指導者だけがみんな学校卒業して……。

前澤 工場へはみんな入っていくけど、全然運動になってない。

関 運動になってないのはMLの場合もそうだったんでしょ。京浜地区へバアーと配置して……？

三戸部 僕らはML同盟を再建する前の社学同の方針で、全員学校を卒業させなかった。卒業すれば絶対大学卒の資格に頼る。だから卒業しちゃアカンという組織命令だった。その路線が正しかったかどうか、今は自信がない。というのは、当時頑張っていた東大のグループのメンバーなんか、それなりの地位に立っていい仕事をやってい

る。議会であれ行政であれ、みんなそれぞれやっている。そういう意味で、大学を卒業しなかった方が良かったのかどうか、今となっては何とも言えない。でも当時は1961、2年の平均で大学に進めたのは男が15人に一人、女が25人に一人位ですよ。63年経済審議会が出した経審レポートによると当時の人的能力開発計画で想定しているのが、大学卒を一応ハイトalentと考えるとして5%、どんなに多くても6%どまりだったっていう。それから今の状況は絶対見えない。

だから当時の状況で大学を卒業しなさんと言った事は、それなりの意味はあったと思う。やっぱり特権階級だから。でも、今みたいな大衆状況になるとはたしてどうか、という問題が一つある。それに関連して、ブントの味岡君は、当時早稲田闘争と(註103)か学費闘争があった時に、反産協(産学協同)(註104)路線でいうのがあって、あの論理を青解がしゃべったら、彼は「反産協・マスプロ教育反対と言うが、マスプロ教育というのは教育が大衆に開放される側面も持っている。その事に対してどういう視点を持っていんだ」ってはっきり言った。やっぱり味岡は思想的に見たってユニークな男なんだよ。

そういう並びでたとえばファシズムなんかを歴史時代的に見ると、人民を直接に支配の側が政治意識としてもオルグしなければ持たない時代になった。それに対してグラムシ(註105)、トリアッチ(註106)のイタリア構改路線(註107)ヘゲモニー路線を出して来るのは、そういうファシズムに対してどっち側が人民の政治意識を直接に集約するのかという問題として出てきてる。そういう意味で今は、高度大衆化状況に対応する我が方の社会的な政策・視点、この辺がスッポリ落ちている。それが連赤事件なんか唯武力主義(註108)に短絡していると見るべきだと思う。

そういう意味での相対的な責任の軽減ということは、ひとり永田さんや森君なんかに帰する事のできない、運動陣営総体が負わなければいけない責任がある。今後の弁論もそうだし、あらゆる総括作業を進める必要があるだろうというのが、僕がここに関わっている理由だけだね。

その意味での社会的諸関係に関する視点というよりも、生活の知恵とか生活のスタイルとかが、公判記録読んでても、ピクニックに

行ったという以上には何にも出ていない。ちょっと緊張感のあるピクニックだったというだけ。悪いけど。

佐藤 69年6月、工場だって10人とか15人で学習会している所へ、上から来る方針はバリケードストライキやれ！と。誰がやるのかという感じ。学生がやる事そのままこっちへ持って来る。内部事情知らないから。そりゃ生活感覚ないよ。誰がどうやるのか聞いたなら「それは目標だから」なんて、何かよくわからなくなって。安保の街頭デモに出るだけでもできない状況で、5、6人の中核でやっとフラクションできたところに、ワっとくる。分かんないね。

前澤 それで最後に、社長室占拠やれって。神田の本社。なんでやるんだっていったら新聞の一面に載るからって。その前に川崎高校でやった、職員室バリケード封鎖して中に一人か二人いたのが新聞に出たんだって。だから神田で労働者がやれば出るって。

三戸部 そういう奴が一方でブルジョアマスコミなんって言って、全然話が整合しない。考えてみりゃ、当時組織とか何とかいってもムチャクチャやったのは事実なんだよね。

関 社会的な視点がなかったというのは、当時そんなにややこしい社会のしくみじゃなかったから、みんな貧乏じゃないにしても爛熟してなかったから、割りとみんなツーカーでわかり合えてたところがあった。あんまりややこしい話をしなくてもすんじゃっていた。それで、そういう視点がないままに新しい段階に入った時に、多分今までなら「この野郎」でブン殴ってゲヴァルト（註109）で済んだものが、古いものがブルジョア思想とか何とか含めて全部出てきて、それで対処しきれなくなったと思う。

佐藤 60年と違って労働者部隊が動いてない。動いているのは学生だけ。その落差はある。労働運動をやる時は時間と労力がかかる。それだけの時間がない。

森 一応タイムスケジュールがあるから、そこに向けてっていうのが必ずあった。

三戸部 だけど労働運動は時間かかるって本当なのかね。俺はそう思えない。俺らの言ってる事ややる事にリアリティがあればすむ事だと思う。要するに俺らにリアリティがねえから、しょうがねえからのっぴきならぬ関係を相手に迫っちゃってお前が言う事ならしょうがねえなんて渋々認めさせる、そういうオルグだから時間かかる

んじゃないか。これやったら絶対勝つっていうならみんなパッと乗ると思う。庶民でものすごく打算的だから。行けるとなりゃ稼いでるんだから金はパッと出すし。

八木 でも、その方針という時にはやっぱり人を見る。方針にリアリティがある云々は、同時に方針を出しているその人のリアリティとか存在感とか信頼感とか、そういう人を含めた話になる。

共産主義化という精神主義

三戸部 その問題は、例えば兵士を形成する問題なんだ、やっぱり同じ問題。

兵士を形成するのにそんなに時間かけられないのか。生活はそこにかけてって少々行き詰まる位だけど、兵士になるのは命がかかっちゃう。命がかかるオルグがパッとできて、少々生活が苦しくなる位かけさせられない。そのオルグ能力、プロレタリア階級形成論（註110）、プロレタリア兵士の形成、それがあの森恒夫の共産主義化論（註111）という形で出てきたんじゃないの。あいつはそういう意識だったんじゃないの。文章読む限り俺はそう受け取っている。

森 森の文章は読んだって何言いたいのかわかんない、実体がない。

三戸部 俺は森の遺稿集読んで実によくわかる。出牛（註112）なんか「森は革マルだから」っていうけど、そうじゃなくて兵士を、軍人を作るだけじゃなくて普通の社会人・勤労大衆をオルグしていく能力をどう獲得するかと考えた時、すごく行き悩んだんじゃないの。どういふことでオルグするのか。

雪野 その場合、オルグして何かやらせるわけでしょ？

森 オルグするって言ってもそれも実体ないからね。

雪野 森が問われたのは、兵士だって戦争がなければ、待っているだけの存在だから、その場合、兵士にするっていうのは、ある軍事行動をする兵士にするってことでしょ？

三戸部 軍事行動は考えてないでしょ。考えてたの？

前澤 中核派がもってるのは、誰と誰が何回パクられたということ、やっぱりオルグなんてあれしかない。要するに自分でやるより

ない。それが欠落していて、自分でやる気がなくて、みんなにより高いものに到達してやれなかったって出てこない。永田と森が一番ビビっていて、その二人がみんなにしっかりせえっていったって。

三戸部 森は実際の所、軍事行動を起こす気があったの、なかったの、今の視点で？

八木 主観的にはあったんじゃない。計画は持ってたんだろ？ 5月の沖縄返還に照準合わせて。(72年5月に)小蜂起とか出て来るよね。

森 蜂起が小蜂起になっちゃったのは力関係の問題だと思うけどね。

三戸部 それは何をやる予定だったんですか？ 何か聞いている人いるんですか？ 例えば10人くらいの小銃隊と爆弾と何とか持ってとか、考えがあるでしょ？

関 具体的にはまだなかったんじゃないですか。先に小蜂起という言葉があって、そういう事をどこかで何かやりたい。返還に合わせて沖縄へ行くなっていったかな、程度の。

雪野 いや今問題になっているのは山で総括始めた後の話。71年末に榛名(註113)に行って、その頃言ってた？

三戸部 もっと聞きたい。71年の秋、11、12月みんなが山に入ってくる頃、総括の直前、あの頃みんなは空気入ってたの、入ってなかったの？ 森と永田だけじゃなくて、山に行っていた人達全体で士気が充満してたの？

前澤 はっきり言ってあの頃はボシャってた。そりゃそうだよ、やろうっていうと一人抜けて、やるメンバーが抜けて計画は先に伸びて、調査やり直すとまた一人抜けてやり直す、の繰り返し。

三戸部 なんかやってやろうと、具体的に意気軒昂だった時期はいつあるの？

前澤 瀬木が山からいなくなる前(11月20日)まで。それは個人でなく全体の話。あの頃まではとにかくやる気でいた。

雪野 6月に山へ入ってから行ったりきたりしていたし、初めは軍事訓練。その後4か月間に二人殺しているし、ベースの移動が4回もあるし。ベースの移動は大変だった……。

まず適地を探す。地図を見てここら辺が良いというところへ調査隊がそれぞれ二人か三人のパーティでまず行く。行程としては3日

位、山に泊まりながら行き、麦飯食う位で見てくる。帰ってきてあそこがいいということで、移動することになる。それも荷物が結構ある。建築資材も前のアジトにあったやつを束ねて担いで山越えして持っていく。だから移動するのも10人がかりで延べ何日もかけて、それは非常に消耗な作業なんだ。

関 普通のアジトの引っ越しだって結構大変なのに。

前澤 遭難しかかる奴はいる。比較的浅い山でハイカーが通ったって言っちゃあまたうろうろする。最初向山君(註114)が出て、塩山、大菩薩のちょっと先へ移ったら早岐さん(註115)が抜けたんで今度は丹沢に移って、またどこかのアジトで大量逮捕くらって4、5人一遍にやられて、また南アルプスに移って、そしたらまたパクられて……。

雪野 その状況はおそらく抽象的に山岳アジトという事ではわからないと思う。実際は移動の日々で、大変。それも何かある所で作戦やるために前進基地として行くという話じゃなく、誰かが抜けたから止むなく、長征！

村井 唯一言えるのは、都市アジトと違ってそこへ帰れば、テントであれ掘っ立て小屋であれ安心して眠れたっていうだけ。

三戸部 軍事訓練で山にでかけた。俺なんか鉄砲撃って戦争やるなんて考えると恐ろしくてしょうがないんだけど、早岐さんなんかの事件が起きる前はみんな意気軒昂だったの？

雪野 鉄砲というものは持てば撃ちたくなる。鍾乳洞で2、3発ずつ撃つ。

前澤 永田さんを除いてはみんなやる気あった。新倉(註116)でピストル撃てなかった時の残念なこと。とにかく全員で一発。タマがもったいない。一人が撃って、それをみんなが精神込めて見ているという……。

三戸部 チャカ(註117)の弾は非合法だからそんなに訓練できねえけど、ライフルなら何百発でも金で解決すればいい。

関 俺はそうやって買った。そして銃の部隊で練習やるって言ってたら、これは武器庫に保管するとか言われて持っていかれた。

雪野 小袖(註118)で散弾銃の訓練した時だって、例えば寺岡(註119)はこういう言い方をする。ただ撃つなら百発撃ってもダメだ。あれはただ的じゃなく人だと思って、人を殲滅するんだと思って、そ

ういう意識を作るための訓練としてやらなきゃダメだと。だからもう技術じゃなくて、精神修養の一儀式みたいな形でやらせる。それに対して純技術的なことを言ったら、それは殲滅の意識性がわかっていないと……。

三戸部 そういう意味での社会的な知恵まるでなかった。

森 知らなかったと言うより、全然が眼を向けていなかった。精神主義で乗り越えちゃおうという発想そのものが、物事を何とかして行こうというのと違って来ている。

村井 物を考える癖がついていない。考え方なんていろいろあるだろう、方法考えて見よう、調べて見ようなんて癖がついてない。考えないで何かあると「これはこうだ」って、それを乗り切るのに精神論が接木されている。

関 やっぱり竹槍とか帝国主義軍隊とか、そういうのとどうしてもからんできちゃう。

森 軍事行動のイロハ、諸準備（調査含む）、行動計画、実行、早期に撤退するなり制圧するなり、その行動によってその後の状況は変化するからそれを読み取って次の行動を準備していく。そこまでやりきらなきゃ軍事行動できない。そういう考え方は全然ない。ウチの方もなかったけど。

7・6内ゲバの経緯

三戸部 そうなると、諸準備から始まって八木先生にもう一つ報告してもらわなければいけない。69年6月までの大要は話してもらった。7・6のことと、偉大なチョンボ・大菩薩（註121）の話。そこまでもうひと仕上げしてもらわないといけなない。

森 7・6は、内ゲバ止揚の問題として総括しとかなないと……。

八木 6月迄で、いわゆる赤軍派のフラクシヨンの結成と、秋の前段階蜂起まで行った。そういう事態の中でちょうどその頃、ブントの書記長の渥美氏（註122）が、防衛庁でパクられていたのが出て来て、彼が精力的に動き始めた。仏氏なんかと意思一致したり、関西のバラキン（註123）なんかをオルグしたりしていた。それで仏と二人で「プロ通」（註124）という内部通信を出す。その「プロ通」に、東京の

地区代表者会議を開くということが出ていた。特にそこには赤軍派批判でフラク解体、と書かれていて、この地区代で赤軍派を処分する、と。本来、地区代はそういう決定機関ではないのに、そうはつきり出てたのか、そういう話がウワサとして流れたのか。当時の仏派の中心メンバーに聞くと、そういう処分とかいうことは全然なくて、むしろその後学習会の予定だったというふうに言っているけれども、とにかくそういうことがあった。

我々の方は、構えてこられた！と。ここで一気に処分して決着つけようという形で出てきているという風に受け止めた。それは阻止し、粉碎しなければいけないということになった。そして、7月6日に明大和泉校舎を襲った。

ちょうど仏派がそこに泊まり込んでいた。別にゲヴァルト構えてたわけではなく学習会でだったというけど。それで襲っちゃって、仏氏とかを捕まえて迫って、リンチしちゃった。主要なメンバーの命をどうこうするとかそういうリンチじゃなくて、脚を棒で折るとか、動けなくするということだった。

話によれば高原は、佐藤秋雄なんかに「何の恨みもないけれど、しょうがないからや」と言ってやっていたと。それも、やっちゃおう！という意味一致はしていなかった。むしろ、相手も当然ゲバルトで構えていると予想して、行ったら不可避にゲバルトになると予想して、ゲバ棒とか用意して行ったのに、相手は何も武装していなかった。出てきたのは仏派で、あとBL派（ボルシェヴィキ・レーニン主義派）というのがあって、これがまわりでチョロチョロと抗議行動している。

中大派は非常に深く読んでいて、一切動かなかった。

動かないで、権力が入る事を予想していて、みんなが逃げて来るのを待ち構えて、捕まえて拉致する。

だから赤軍派からすればリンチ云々は最初から予定していたんじゃないくて、ゲバルトになると予想してたのが向こうが用意してなくて、行った以上は、しょうがないという感じで、このままサッと引き上げるわけにも行かないと。その時のその場の感じでやっちゃった。

そして機動隊が入った。みんなバッと逃げたけど、仏氏なんか脚折っちゃってて、動けない。それを助けださなきゃいけないとい

う考えはなかった。そういうことは仏派が仏派で当然やるだろう。自分らは自分らで、と逃げちゃった。結局仏派も何人かは逃げた。仏派の一人は、パクられて警察病院に連れて行かれたのを、病院に行き毛布に包んで有無を言わずサッと救け出して、そのまま知ってる医者の方へ連れて行った、ということもやっている。

仏氏はそのままパクられた。そうして我々は医科歯科大の方に逃げて帰る途中、中大のグループに待ち伏せされて、塩見と望月と物江と花園の4人が中大に拉致された。

その頃、党内闘争という点では全国的には全然組織化されてなくて、東京だけで煮付まっているという感じだった。関西では学生は大分オルグに入っていたけれども、他の部分で見れば、何か始まっているらしいという位で全然よくわからないまま、ドンパチやっていた、「何だ？」という感じが強かったと思う。

赤軍派の方はその後、関東学院大に一旦引き上げてそこにこもる格好になった。そこで三つの問題が常に延々たる議論になった。

要するに仏氏をやったという事より置き去りにして権力の手へ渡した事の責任をどうとるのか。それと塩見を中大に拉致されているのをどう奪還するか。ともかく、先ず組織の生命をかけて仏氏の奪還をやらんとアカンとか、塩見の奪還やんなきゃいけないとか、仏氏を権力に渡しちゃった事の自己批判をどうするのかとか。それともうひとつは秋に前段階蜂起やらんとアカン。だから仏氏を奪還するのか、いやそういう自己批判はしなきゃいけないが、それは逆に前段階蜂起の貫徹によって出すべきだとかそういういろいろな議論があって、その辺の議論がまとまらないうちに中大の方とのボス交も半分つきかけた所で、向こうの中とも連絡取れたりして、塩見と物江と望月と花園を救出した。こっちから行って、ロープじゃなくカーテン裂いて繫いで。その時望月が中大の学館から転落して死んじゃったけど。

それまで中大とボス公で何回かこっちのメンバーが三人位行って塩見と会ったりし始めていた。それで一応あの日にそうやると決めていた。

そういう過程で当時から、他のフラクは別にしても赤軍派から見れば、6月の末に行った時ちょっと印象で思ったのは、もう、党内闘争として全国的に組織化しようという雰囲気はないんじゃないか。

行政的に、もう決着つけようという感じを持っていた。しかも医科歯科大に立てこもってあそこにみんな集めて、そこでワーッとアジって意思一致している。こういうやり方になると組織的なキチとした形がとれなくなって、活動家集会でアジって意思一致しているのと変わらない論理で流れて行くから、そうなるちょっとヤバイなと思っていた。だから外からちょっと離れて見ていると、7・6なんかどうしてそんなに襲わなければいけないのか。むしろ決議するのなら黙って見て勝手に決議させたっていいじゃないか。地区代でそういう決議した者が、逆に党内的に不利になる。党内世論としては、そこで決議したらそれに対する反対の方がはるかに強くなる。だから勝手に決議するならさせておいて、それを逆手にとって党内闘争を貫徹した方が勝てるんじゃないか。むしろ、向こうの仕掛けにはまっちゃったという印象があった。

関——そういう感じは八木さんは当時から持っていて、それを出しています？

八木——個人的には言っていた。

関東学院大学に立てこもっていたときも塩見がいなくなっているし。とにかくそこで共同生活していて、一応指導部はあるものの組織というより全部集まって意思一致するという構造で動いていた。そうして塩見なんかが出て来て、関西に移動したりしていた頃の議論で一つあったのは、このまま秋の前段階蜂起のために突っ走るのか、それとも7・6をキチッと自己批判するのか。自己批判するとは口だけの自己批判じゃないから、もう一度党建設という観点からとらえかえて、分派を解消してブントに復帰すべきではないかというのがあった。塩見はチラッとそうすべきかなあという話もした、それは8月の半ば頃。外へ出て来て結成大会開くちょっと前、関西に行っている時だったけど……。他のメンバーに猛反対されて、大体戻るといっても指導的部分は全部除名されるだろうし、戻るとなればここ1、2年でどうこうというのではなく、もう一度4年、5年という単位で考え直そうという話になるが、それはおかしい。前段階蜂起を掲げてこうなったんだから、あくまでも前段階蜂起貫徹で進むべきだということになって、8月の末に赤軍派の結成総会に至る。

7・6の具体的過程はそういうこと。

前段階武装蜂起の敗北

雪野 前段階武装蜂起の方針に対してはどういう考えを持っていた？

八木 当時はもうひとつチョット、というのがあった。しかしとにかく何かやらなきゃいけない、結局武装闘争やらなきゃいけない。武装闘争＝武装蜂起、ウーンというのがあって、しかしだからどうなんだという考えは出ないから、そりゃ行くよりしょうがない。特に「現代革命」No.3の攻防の弁証法でどうこうという話になっていくんだけど、これはいわゆる政治過程論的な印象が強くて、秋以降の先が見えないし、ウーム、ちょっと……だった。でも、とにかくやらんとアカんだから、と。じゃあその前段階武装蜂起で具体的にどうするのかという計画はその当時はほとんど明らかでなかった。

佐藤 官邸占拠（註125）は？

八木 それはもう少し後になって、10・21に失敗した後に出てきた。

森 観念的にはもっと早くから出ていた？

八木 それは4・28からずうっと一貫して、68年の11・7以来「中央権力闘争・首相官邸占拠」。

森 「赤軍」の「戦争宣言」（註126）か、上野さんが書いた文章に出ている。それにしっかり大言壮言してある。水力発電所を爆破せよとか……。

八木 あの頃は上野は吹きまくっていたなあ。彼に感じたのは、例えば大阪戦争（註127）。これは一方で、表でやっておいて、その間に中央軍が動いてどこかの交番を襲って武器を取るという計画だった。上野はよく、これやると破防法が発動されて世の中が変わると言った。じゃあそれに対して、それに備えた組織の作り方を今からどうしていくのかという話には入らない。とにかくやって、破防法が出て、状況は一変すると。

森 さっき八木さんから出たように、要するに秋に前段階蜂起をやる。それ以降の方針は何にもない。全然見えないという状況の中で、だけど貫徹しなきゃしょうがないだろうと走っていつている。

それはそのままそっくり連赤の方に行っちゃっている。

武装闘争をやらなきゃいけない。それが武装蜂起で首相官邸占拠で、じゃそれで一気に勝てるかというと、もうひとつ勝てるという感じはない。そうすると、それ自身としてはかなり玉碎的だというイメージがある。でも、玉碎的になるのはむしろ10・21の後。大阪戦争、東京戦争（註128）で両方とも失敗する。これにも意見があって、花園なんか、何でこんな事ゴチャゴチャやるんだ、もっと武装蜂起に向けて準備を一生懸命組織的にやった方がいい、と言っていた。しかし全体としてこちらの気運は、ブチ上げているから内部的にも意気は上がっているし、注目はされているし、全体の流れが秋に向かってやるという高揚した雰囲気があってそれと結び付いているから、行け行けだった。

10・21に計画したことが、全部失敗する。全体の流れは10・21を節目にして羽田闘争へと流れて行くから、こちらの前段階武装蜂起という観点からはチャンス逃した。中央権力闘争で前段階武装蜂起で首相官邸占拠含めて言うなら、各党派、無党派含めて霞が関制圧とか言っているから、そういう形でワーっとしている時にやり切るといのがイメージだった。ところがそこで失敗した。できなかった。そうして流れは中央権力闘争じゃなく羽田闘争へと流れていく。そうすると前段階武装蜂起の条件性としては変わっちゃっている。

ああチャンス逃した！局面が変わっている！しかし言った以上はやらなきゃいけないというので、その後の首相官邸占拠云々は一步追い詰められて出した。そういう意味でかなり玉碎的な方針だし、一步追い詰められているという精神的な重圧がつきまっていた。

この頃ウチの方針は全部塩見が出していた。彼が最初言っていたのは、佐藤首相を捕まえて拉致して来て、日比谷で大衆団交やるか、とか。面白いなあ……って。

前澤 10・21は何で失敗したの？

八木 一言で言ってしまうえば技術的な準備が全然できてなかった。

雪野 キッチリやる準備をする体制なり人なりは？

八木 配置はしてあったけど、当時の混乱で指揮系統もかなり乱れていたし、そこで連絡が取れなくてドッキングできない、ブツが来ない、車が来ない、人はきたけど集めておく場所が無いんで一旦

分散させて、とか。何故その準備がうまくいかないかというと、まず大阪戦争やって、次に東京戦争、それから準備。だから時間がなかった。あれで関西の部分に関西にいられなくして東京に来させて、軍に編入しようということ。

関 だったらむしろ10・21の準備として大阪戦争、東京戦争をやったという事？

森 大阪戦争、東京戦争は、そもそも関西地方主義の発想から出ている。関西でひとつ事を起こして中央に持って行こうという地方主義の名残じゃないかな。東京に全部持って行ってやるんでなくて。

八木 軍事行動としての狙いには、さっき言った公然部隊がやっている間にそこに引き付けておいて、別の交番襲ってコレ（拳銃）を奪うということだった。

森 チャカの話は、あれも準備不足があって技術的にどうすんだって、僕が福岡に突っ込んだ。追求するなら追求するなりのやりかたがあるし、そうでなければただ闇雲にやっても結局取り切れなくて逃げる事になるけど、どうなんだ、と。そしたら最終的に取れなければ取れないでいい、しょうがないという方針に最終的に変わった。

関 人は配置した。それぞれ結局器量で頑張るしかないっていう。

森 初めは中に火炎ビン放り込んで、当然飛び出して来るからそれを棒でブっとばして、綱を切らないかんからはさみなんかも用意して、それで取っちゃおうという話になっていた。けどおれが火炎ビン投げて後を見たら誰もいなかった。逃げ出して来ているのに誰もいない。そんなだったから、実際にどこ迄やる気だったかわからない。

八木 東京の場合も一応行って、配置して……？

森 あれは後で、検事だったか言ってた。あの時お前らやらないで逃げたって調書に書いてあるけど、あのときたまたま研修か何かで2人ポリ公が余分にはり付いていたんだと。2人の予定が4人になっていたんで、こっち側の計画が何らかの形で察知されて向こうに準備されたんじゃないかという思いがあって、一端引いて様子を見ていたんだけど、研修ならそんなに早く帰らんわ。それで結局そ

のまま立ち消えて、何もやり切れず、後は本富士署（註129）で火炎ビン投げて神田あたりでワッと騒いだ程度で終わっちゃった。

八木 大阪と東京をめぐるって、中央軍内部での総括はどうなっていたの？

森 やっぱり諸準備やり切れなきゃ具体的な闘争に着手できないから、技術の問題、武器の問題、そして規律の問題、この辺を解決してくれという形での要求が、あの時キャップやっていた田宮（註130）には出ていた。その後10・21にいくが、あれも結局技術的な問題が全然解決されていない。あの時僕は松平（註131）と一緒に喫茶店で待機させられていた。

一旦引いてしまうと再度というのは難しいかも知れないけど、少なくとも朝まで、準備が整うまで待つ。向こうもそろそろバテてくる頃だし、こっちもいなくなつてはくるけど残党部隊がいくらいる。だから朝まで待つか、もしくは、それでも準備が整わないなら体制立て直してもう一度やり直せと言った。多分あの時出たのは塩見だったと思うけど、電話の向こうで「いや、今日やるんだ。絶対やるんだ」って怒鳴っていた。

そういう状態だった。10・21の時も、俺は関西の部隊が来るんでそれを一泊させて次の朝引き連れて現場に行った。それだけの面識しかないから、立命館大からきた一人を知っているだけで後は全然知らない30名。それを指揮しろっていったってできっこない。P缶（註132）が8、9個来て、それを何人かに持たせて、火炎ビンが当日現場に届いたけどレッテル（註133）が貼っていない。レッテルをビンに留めるゴムも糊もない。だからそういう風に準備が何にもできてないで、ただやれっていう感じだった。

八木 あの当日か前日か、薬科大で鉄パイプ爆弾でパクられて、あれも大きかった。

森 それに、鉄パイプはちょっと意思統一していないと投げられない。P缶も持たせたけど導火線が上にこんなに付いている。いつまで持っていられるかわからないから点けたらすぐ投げる。すると揉み消される……と。

雪野 揉み消すのはできない。導火線を抜かれる。あれは中で接着剤を入れていたからそこで火が止まった。組み立て方を間違っている。もともと爆発する構造ではなかった。たまたまうまくいった

のもあったけど。

八木　それで、10・21はやれなくて、引き上げる途中で若宮達（註134）がああP缶を機動隊宿舎に投げて帰った。それが例のP缶事件。

森　あの時ナカで、検事に若宮の事聞かれて、「俺の言える事はいま土・日・P（註135）でつかまっているあの連中は冤罪だよ。真犯人が挙がろうが挙がるまいがあんたたち敗けるよ」と言ってあった。結局容疑を固め切れなかったでしょ。もうメンツだけよ。俺達の前段階蜂起といっしょで、行くしかない。

八木　そういう失敗で全体的にはガクッと来て、特に指導部は完全に！

田宮は「しまった、どうしよう、しまった、どうしよう」。上野は「史上最大のカラ手形がどうこう」。みんなは「ウー――ッ」……。

森　「ウー――！」はいいけど、あれで関西の連中は物凄く消耗しちゃった。関西の、軍じゃない学生組織の連中は、登場できなかったっていうんでさ。

国際根拠地の夢・大菩薩への道

八木　それで、誰もイメージも方針もなかったけど、その時、最高指導者の責任を取る形で塩見が次の方針として最終的に言ったのが、もう一回来年の秋に戻って来てやるという方向に向けて国際根拠地作りと。しかし今、国内で何もやらない訳にはいけないから、とにかく玉砕覚悟で首相官邸をやんなきゃいけない、と。

全体を三つに分けよう、と。玉砕で首相官邸占拠やるのと、国外に国際根拠地作りで行くのと、その後国内で残って云々するのと。で、軍は全員山で、首相官邸にそのまま行っちゃう。国際根拠地で外国に行くのは、塩見、田宮、花園プラス何人か。で後に国内で残る責任者（八木）という布石だった。

首相官邸をやるにしても、メンバーを集めて訓練やらなきゃいけないし、事前から隊として行動するようというので、大菩薩に集めた。大菩薩はいろいろ調査もして決めた。残りの部隊はトラックを取ってくるとか、武器とか宿舎を用意するとか、とにかく全員で

やろうと。わからないけどとにかく最後までやるしかないんだと。だからその先どうこうというのは一切無し。

森　それに至る過程の赤羽会議で花園は反対した。あの時、反対したのは、牧野、若宮、花園、俺は技術的な問題が残ってるんじゃないかってふっかけてたけど……。

八木　若宮は玉碎的な方針はおかしいと、花園は準備もちゃんとなしにジタバタするな、やるなら本当にやりきらんとアカン、今まで今年の秋に前段階蜂起といっても具体的な計画もなく、やれ東京戦争だ、大阪戦争だとゴチャゴチャして結局何もやれなかったじゃないか、という。

森　だから花園氏あたりが軍の気分をかなり代弁していた面はあった。田宮は黙っていた。他は皆、黙っていた。俺達から準備の状態とか散々言われているから、なにも言えない。

八木　花園はその秋の過程にあんまり深く関わっていない。田宮と花園で軍を指導していて田宮が一線指揮。作戦の指導は塩見と意思一致して田宮がほとんどやっていた。田宮、上野はガックリ来ていたから、もうわからんと。自分では方針もイメージもないと。とにかく塩見にゲタを預けると。塩見が最高責任者だからお前が方針だせと。お前が出したらその通りやるから。だから自分から積極的に人をオルグして、ワーッとやろうというのはできないけど、とにかく方針が出たらその通りやると。

森　赤羽会議の前に一回会議がある。中央軍の会議だったか、その時に10・21の批判として技術的な習熟がないとか、諸準備の問題とか出されて、じゃそれを確認するために軍事訓練をやろうという話になった。さて候補地をどこにするかで、瀬戸内海の小島とか三つくらい候補地が上がって、最終的にワングル（註136）で行ったことがある者の話などから、軍の方の軍事訓練の場所として、大菩薩峠はその時点で既に設定されていた。そこへ今度首相官邸襲撃の話が接木でくる。だから、軍がそこで訓練やっているなら、その日にちを調整して首相官邸襲撃に向けた軍事訓練と一緒にやろうという形になってきた。

八木　そうだ。訓練はやると先に設定していたんだ。その時まで全体の方針は出ていなかった。

森　訓練という内容でオルグして、準備させて来ている連中が

かなりいたわけ。ところが塩見のほうは軍に対して官邸周辺の調査・視察をやっとけてことで、三々五々行って調査してきて、それを作戦地図に書き込んで、人数の配置もやった。当初百名規模でやるということだったけれど、オルグしてきたのも含めて60名位しかいなかった。話を聞いて見ると訓練だと思っているのが大分いるし、これはきついな、また同じことになるな、と。大菩薩で訓練して、松戸のアジトへ移動して、それから出撃する形になっていた。

雪野 松戸のアジトってどの位の大きさ？

森 松戸と、他にもうひとつふたつあって、3つ位に分ける事になっていた。松戸は武器庫にも使っていて、ガサ（註137）でP缶や火炎ビンが出てきている。当初100名と言っていたからその100名をどこに隠すのか知らないけど、個人的な感想としては、この内何人残るかなというのが正直な所あった。それで計画縮小してやりきれないかどうか。100名来て50名残れば、半分の規模でどうにかやりきれないことはないかな。だけど50名が更にいくらか抜けちゃえば、軍のメンバーで来ていたのが15名位しかない。後は上京組。上京組との意思一致はそんなに深く詰められていないから、どうしようかなという感じだった。

そんな状態で準備もほとんどできていない。それで10・21の焼き直しという頭があった。だから直接軍事の方のメンバーとしては、技術的に無理だという感じ。あの時、来るはずで来てないメンバーはそれなりに意思統一できるから、訓練等はそんなに必要ない面もある。それはそれで合流すればやれるけれど、その動きは全然わからない。他のアジトへ移動するにしても、全員まとまって行くわけにいかない。当然タッチアウェイ（註138）と言うか、集結して分散してまた集結してという形をとる。権力との関係もあるし、途中でずかるメンバーも出るだろうし、その脱落を含めて30～35残るかなという感じだった。

そうなった場合に、さあ軍としてどうするか。僕は勝手に田宮なんかに文句いっていたんじゃないで、下の連中から「こんなんじゃない」みたいな文句がいっぱい出てきて、それを受けて言っているから納得しないもの。そうするとまた塩見さんとドンパチしなけりゃいかんかな、と。

関 菩薩の訓練の時に後追いで官邸占拠が出てきたというのは、

やはり塩見さんから？

八木 うん。だから訓練は要するに10・21の総括の過程で出てきた。そしてもう一方政治局のレベルで、総括は総括として次どうするかでいろいろあった。その中から国際根拠地と首相官邸占拠という方針が、ちょっとあとになって決まった。

森 でもあの国際根拠地論、僕はナカに入るまで知らなかった。

八木 じゃああれは政治局レベルだけの話かもしれないな。

森 実際に文書になったのは「赤軍」No.5。ハイジャック（註139）後の「赤軍」特別号でハイジャック声明（註140）出して、あの後だもんね。国際根拠地論については、かなり論争があった。全体的にそういう感じで、菩薩から首相官邸は、客観的には聞えない状態だったと僕は思う。主観的にはやろう、やろうだったし、その主観的意図を防衛しようと上野氏なんかが、俺達は首相官邸占拠をやろうとしたっていう形で裁判闘争をもって行った。それは対敵関係だから、やるつもりありませんでしたじゃなくて、実際やれたかどうかは別にして、やろうとしたことは防衛しなきゃいかんという形で、裁判方針は出てきた。

雪野 万一首尾よく占拠した場合を想定した議論はされなかった？

八木 してない。

村井 行くんだ、っていうだけ？

森 ある程度はあった。佐藤首相を捕まえて政治犯の釈放を要求する。ヤバイ連中は外に飛ばそうとかいう程度の。それから「全国全共闘」集めて霞が関占拠とか。訪米を中止させようとか。

雪野 首相には政治犯の釈放を要求する？ それだけ？ 何かつつましい蜂起だね。

森 権力を握るというような発想はない。権力闘争といっても向こうの権力をひっかき回して状況を切り開いていくという玉砕戦術だから、まあそれ以上あってもしようがない。

山中 4・28の時の中枢制圧の中央権力闘争、結局その流れなんだね。

八木 そう。一貫して中央権力闘争というのがあって、霞が関なり首相官邸占拠は68年の11・7以来ずっとある。それが今は機動隊に軍事的に抑えられてできないから、これを武装してやろう。それが要するに武装蜂起。だから撤退のことも一切考えていなかった。

雪野 爆弾しか持っていないから、投げ終わればおしまい。

森 前段階武装蜂起は敵の制圧を目的とした蜂起ではない。そういう意味で後に出て来る小蜂起とも似ている。あの時想定していたのは、官邸前の道路を両側封鎖する。そして突入部隊を二手に分けて突入する。そして中で首相を拉致する。その行動を阻止隊が支援するというイメージしか持っていなかった。

八木 拉致というのはそのときにはもうそれほどなかったんじゃない？ 入ってうまくいったら、というのもあったけど、どっちかというとヴェトナムの解放戦線がテト攻勢の時にアメリカ大使館に突入したあの感じだった。

雪野 テト攻勢は、川島豪が一時期、テト攻勢型の蜂起みたいなのを獄中で書き散らしていた。ゲリラ型蜂起だとか。

八木 テト攻勢はかなり大きな蜂起だよ。大使館襲撃はあれは特攻隊だけだ。

森 だからまあひっかきまわして、旗出したら終わりっていう感じだったかな。

八木 向こうは、霞が関には厳戒体制を敷いている。そこで当然ドンパチやって、何とか勝ち抜いて辿りつこうという考え。

森 勿論、高速道路の阻止線とかも当然想定されるし、そうならそこでやっちまえ。遭遇した所でやる。それを突破できれば官邸へ突っ込むと。

雪野 要するにカミカゼアタックですね？

八木 だから玉砕戦だといっている。

山中 三里塚でも何でも、基本的には同じ形の繰り返し。

森 それでも俺は捕まる気はなかった。玉砕してたまるかって。どうやって逃げるか、具体的には出ていないけど状況に応じてどこまでやってどこで撤退するか。撤退っていう形では考えていた。

八木 森みたいのばっかりだったらあの時もっと雰囲気明るかったろうな。もっと柔軟に敏速にいろいろ対応できたろうな。

雪野 捕まった時はどこにいたの？

森 起きたら、もう踏み込まれた後だった。だからどうしようもない。部屋の中から一歩も出られない。状況の判断を僕が間違えていた。というのはブツが着いているのを知らなかった。

八木 前の晩に議論があって、中央軍のメンバーと確実にキップ

(註141) の出ていそうなのは、今から向こうの山越えて、避難しようかという話があった。

森 そういう話は聞いていたけど、ブツが着いているのを知らないから全然切迫感がない。あの時張り番させたのが若い奴で寝ちゃったという話は聞いたけど、ブツがあってという話になっていれば、それはそれでもう一つ下に山小屋があったし、私服が来ていたのも俺達は知っていた。前日の訓練時点で確認している。

雪野 前日来ていたら、そりゃ手ぶらで来ているわけじゃないから、翌朝来るっていうのは想定できなかった？

森 もちろんできた。どの程度の規模で来るかわからないけど、そこで一発やるか逃げるかみたいな感じだったんじゃないかな。

雪野 来る前に、夜のうちに分散して、みたいな話は？

八木 そういう話は出ていた。夜のうちに分散して中央軍と一緒に山越えて、とか。

雪野 そりゃ一網打尽にされるよりは運動会でもいいけど。

森 最終的には誰が決めたのか知らないけど、俺は全然緊張感なかったから山下りて見にいくこともなく、寝ていた。起きたときには襖の外に機動隊の連中が土足でドカドカ上がって来ていた。

八木 向こうは、一応12時に塩山署に集めて、1時間か2時間ワッとアジって意思一致して、2時に出発したと言ったかな。本当は道路があって車で来られるんだけど、それでバレちゃいけないというので、みんなずっと歩いて、這い上がって3~4時間かけてきた。

関 上から石投げて迎撃戦やったら、楠木城じゃないけど、面白かったのになあ。

森 トランシーバーは持っていなかったけれど、下の小屋に臨時で泊まれば電話もあるし、状況はつかめた。でも俺そんなに何年も放り込まれるなんて思っても見なかった。悪い事やってるなんて意識は全然ないからね。

雪野 向こうはそれこそ決死の覚悟だったろう。しかし向こうにとっちゃ大勝利でしょう。

森 軍事闘争という局面から言えば、もう全然お話にならないという状態だった。そもそも最初から敗ける闘いをやってやるという形で、意識の上でも軍事闘争じゃないんだね。言葉としちゃ戦争

だけど。

八木　でも10・21まではそうじゃない。ひとつひとつの戦闘という意味で言えば、最初から敗ける闘いではない。

具体性なき「前段階武装蜂起」

森　当然どこまで突出して、どこで撤退するかという辺の事もある程度想定されていた。ただ具体的に決めたって、敵がある事だから状況はどう変わるかわからない。その判断は一応指揮官にゆだねるという形になっていた。10・21に華々しく登場して、その後訪米阻止に向けて再度結集を勝ち取っていくという形だから、そういう意味では軍隊を増やすためのデモンストレーションみたいな側面もなきにしもあらずだったんじゃないかな。軍事技術については、第一、政治局そのものが知らない。当時軍事組織委員長だった田宮自身が返事できない。

前澤　しかし、何でそういつも技術的齟齬が？

関　それはさっきも言ったけど、やはり時間がかかる。習得しなきゃいけないことなんだから。

森　諸準備をやりきらないまま、日時を設定してそれに向けて一切を集中しろったって、できっこない。彼我の力関係を見ながらできる事からやっていくっていうなら、またそれはやり様があるんだけど、そうじゃないんだ。こういう規模のこういう闘争をやるとか、それに向けて一切の準備をせよって言われたって、できない。

関　何が必要なのかという事もこっちにはわかっていないんだね。

森　だから、どれくらいの規模で、どの程度のものを用意すれば、車にしろ、ブツにしろどれくらい必要なのかとか、全く具体的じゃない。

八木　そういう意味では、もともと前段階武装蜂起という事の具体的な計画性が、最後まではっきりしなかった。

森　それはイメージの問題にもよるんじゃないかと、僕は思っている。イメージがあれば、花園さんじゃないけれど間でゴチャゴチャやらないでそれに向けてっていう形でかなり長期的な視点持て

たんだろうけど。イメージ自体がないから、いくつかやってみてその中で作り上げていこうという形があった気がする。

八木　武装蜂起というと、当時の我々が真っ先に想定するのはロシアの十月蜂起の、冬宮蜂起（註142）でしょう。

森　パリコンミュンにはちょっと及ばないという感じでね。だから蜂起とか、軍事闘争とかいうものにかかなりふりまわされていたという面があった。

八木　そもそも前段階武装蜂起という時、4・28からずっと言ってきた「中央権力闘争」、「霞が関制圧」あるいは「首相官邸占拠」、要するにそれが機動隊に軍事的に制圧されて貫徹できないので、それを武装してかつ軍を編成して闘争を貫徹しようという事。それはそうとしても、じゃあ、どういうんかな、具体的に我々が編成できる軍の力量は大体見極められるし、他のいろんな勢力の動きとかもある程度想定できるけれども、そういう相互関係の中で我々の具体的な作戦行動として、例えばどういう攻撃目標持ってどういう武器を行使して、どういう軍事行動を貫徹して、そのことによって全勢力の闘争がどういう方向に貫徹しようとするのかという、その辺がちょっと、ずうっと判らなかったんだよな。

森　具体的になっていなかった。話としてはいろいろイメージは出ている。それが相互に関連しあって、ひとつの作戦としては出てきていない。要するに軍事行動があれば、行動を起こすだけの彼我の力量関係のみきわめから、軍事行動を起こしてその後の政治的獲得目標の設定、そして敵の重包囲の中におかれるわけだからその時の撤退の方法、そして強いて言えばその中で変化した状況を踏まえて再度、何を準備していくのか。そこまで含めて検討していなければ、具体的な行動には入れない。それをやりきっていなかったから今まで実際に入れなかったんだ。

八木　そうなんだな。話だけは一方で発電所爆破とか、トラックを用意してとか。

森　たとえば10・21にしても、車3台パクってくる話になっていて、実際にきたのは1台だけ。その時点でもう1台でどうすんだ。後の部隊乗れないよ。3台で行く予定を詰め込んでも2台は要る。来ないんじゃないよって言うてるのに、「ヤルンダ！」でしょ。それで俺達が行って逃げる時に、歩兵部隊はやっと来ている。担いで

やって来てパクられに行っている、という状態。

前澤 ひとつにはさっき言った準備段階の齟齬の問題と、もう一つはそれをやった後どうするのかっていう展望は？

山中 トラック取っておくとか、指令は下ろしていたんじゃない？

森 だから1台きたのは、花園がパクって米子のM作戦でパクられた酒井が運転してきた。そういう準備は一方でやっていたけど、間に合わない。いつから準備を始めたのか知らないけど。

八木 一番最初のイメージはこうだった。前段階武装蜂起で臨時革命政府を樹立して閣僚名簿用意しておく。ということは、かなりもう勝つと。しかしそういう風に勝てるという感じはあまりしなかった。

森 行政機関を握るって、具体的に権力機構を制圧しきれるかといえばそれははっきり無理なわけで、僕もそういうイメージは持っていなかった。

八木 そういう意味で、前段階武装蜂起の位置付けも微妙に変化していつている。

三戸部 その計画は金いくら準備していたんだ。現金は？

八木 え？

三戸部 現金はいくら位持っていた？

八木 一応同志社から京大の自治会を握っていたから、実際に8月も結構使っているけど、9月に入ってから時点で300万か400万位じゃないかな。他にもいっぱい集めている。だから総体としては500万以上は使っている。

三戸部 昔から何かことを起こす時は、どんな時代劇見たって書生っぽが住み込むとか、食い詰め浪人に1年2年飯を食わせておく体制とか人の飼い方、行動の取り方、アジトの作り方はある。

例えば最終的に銃が5丁しか集まらなくてクルマが1台しかこなかったら、それに50人のつける話はない。そしたらその5丁の銃と1台のクルマで現実に取り得る行動を押し量ってやるか、ないしは全体の計画を取り止めるか、二つに一つしかない。その現実を見切る、もっと言えば50人で閣僚名簿を用意する。どんな段階でも一つの所を制圧する人数として絶対に50人じゃ足りない。

森 とくに官邸なんかできない。広いから。向こうで官邸にっている機動隊の人数が50名という報告だった。

八木 それは、こうこうだからそれに合わせた闘争をやるとか、あるいはそれで全体の計画を取り止めるとかになると、組織の存立根拠が崩れる。そこは特に7・6の仏氏の件をめぐるって、分派を解消して自己批判して戻るといふ風にするか、それとも前段階蜂起の旗をあげたから、それを貫徹する事で自己批判するんだという考えがあって、結局7・6総括をギリギリ煮詰めたら二つに一つしか無くなった。それでこっちを選んでいったんだから、もう計画を取り止めるとか何とかだったら、もう組織は崩壊なんですよ、それは。血盟集団ですよ。

森 上は血盟集団でこっちに方針を下ろしてくる。こっちは戦闘団で固まって、それが一緒になって何かやっている感じ。7・6の総括についての政治局内の状況って僕は全然知らなかった。7・6をやって、関東学院大に行って、関西へいったん撤退するって言って。その日のうちにフラクの連中集めて社学同をやめた今日から「赤軍！」って、旗作って同志社の学館から外にぶら下げて、オルグして、9月の頭まで大阪に行っていた。

リアリティのない日本の左翼運動

三戸部 いまの話聞いていて、日本の左翼には伝統的にリアリティとか現実主義とかあるいは生きる能力とかそういうものが、革左も俺らも含めて全部に欠けているね。

森 だから馬の上で「やあやあ我こそは」ってやってるのとか、会津っぼの白虎隊のあのスタイルだね。一貫して。そういうスタイルを踏襲していけば、究極的には「やれない、やれない、やれない」で先鋭化していく。当然連赤にいきついちゃうわけ。やれないやれないで人数少なくなっちゃって、何かやるって一点突破しか無くなっちゃう。

三戸部 もっと言えば、論理的な帰結として一点突破はわかるけど、要するに一点突破しかできない自己の力を見切って、じゃ、今はそういうことやるべきじゃねえっていう風に、例えば中核派はやったと思う。ものの見事に、なし崩しではあれ、69年で全部ダメになっ

た。ガタガタになって組織路線の大転換。先端にいるみんなを騙し騙し、とにかくあそこも「断固やる、断固やる」、俺らは一番跳ねてる組織なんだという意識を下部に植え付けつつやってきた組織が、現実には何もやらないで路線転換やったわけだ。70年6月にかけて、あの傲慢な主流派意識を維持しつつ。だからああいうことは可能なわけでしょ、実際に。

関 やらない組織なんか潰したほうがマシだっていうののしょっちゅう言っていたよね。

佐藤 中核派の場合は、組織がなければ何もないと。組織が存在する事自体が偉大な勝利だという。そういう観点がブントにはない。組織なんかどうでもいい。精神だけ残ればいい。

森 それがブントで、そうでなくなればブントじゃない。

関 何かやるための便法みたいなもんだよね。関西のグループなんか特に多かったけど、結局戦術一致という所でしか動いていない。組織的な一致じゃないから組織を強固にしてっていう発想はない。

雪野 革左の場合はそういう要素もある。例えば若林さんとか、僕なんかもどっちかと言えばその系統で、またそれとは違う連中がいて……。

三戸部 俺から言うと、日本の新左翼組織の中で、やるべきこととやれることの差を見切って、その股裂きに耐えて、組織を運営できた、そういう個性があったのは唯一革共同＝中核派だけ。本多さんの個性はそれに耐えて見せたと思う。それ以外に党的な指導者には恵まれなかった。共産党があればしぶとく生き残っているのは宮本顕治の個性でしょう。体制派は別にして反体制で組織的にキチッと基礎を築いていくのは、トップに必ずそういう個性があるんだと思う。

八木 昔、中核派の清水丈夫（註143）が、いつだったか、日本で本当に革命やる気があるのはふたり、宮本とウチだけだと言ったという、本当かどうか知らないけど。

三戸部 当たってんじゃないの、清水丈夫だったかどうかは別にして。

京谷 聞いていてホッとした。馬鹿なのはウチらだけじゃなかった。相当劣等感を感じていたからさ。

雪野 そういう点で見れば、坂口にしても永田にしても、ブントそのものだね。

三戸部 そうだよ。俺なんかあの浅間山荘をやっているときに、粛清わかんなかったわけでしょ。だから全然衝撃ない。なんだ俺らの経験の延長上だ。それからあの粛清を聞いて、なんだやっぱり俺らの経験の延長上だ。新左翼そのものだって思っていた。

森 俺もあの粛清の話が出てきたときに、俺はやらないって言うところまで行き切れない。状況に迫られればどうか？ 上としょっちゅう喧嘩していたほうだけど、あそこまで煮詰められた中でそれを貫徹できたかどうかかわからない。

八木 そして、69年、70年、やれないやれないで、ドンドンエスカレートしていく。こういうのやるべきだ。ああいうのやるべきだ。だからますますやれない。70年のPBM作戦（註144）なんか典型だよな。塩見がパクられて田宮が行って、なんか凄いいろんな事、こういう事をやんなきゃダメ、やらないんだったらもうやめた方がいい。それで結局やれない。やれないから止めますという。

森 連続蜂起もそうだった。たった一回の蜂起もできないのになにを連続蜂起なんて、ふざけた事言ってんだっていうのがあった。問題がゲリラか蜂起かってことになってきてたからね。

山田孝さん追悼会

関 博明



昨2003年11月22日京都駅前のホテルで山田孝さん追悼会が行われた。連合赤軍の一員として山田孝さんが妙義山中で死去して32年、ようやくの開催である。参加者80名程。春の東京での連赤全体の死者追悼会の参加は40名程であったが、これはこの間のブントというより赤軍派系の催し(「集会」でなく)の開催状況にぴったり符合する。

主催者側挨拶は重松さん。30年以上もこうした集まりがもてなかった、今日は何を言ってもいい、た

だし自分は正しかったとか、だれそれが間違っていたとか、そういう言い方だけは止めて欲しい、今日は山田の会だが森も含めて追悼する会にしたい、と。参加者の発言の初めに、かつての妻原田さんの挨拶があった。元気そうな姿を見て、「胸のつかえが下りた気がする」といった者もいた。その後参加者の発言は続き、一人芝居、音楽などもあり、近所のピアホールでの二次会にも引き続いた。

「全体像の会」からは6名参加した。会の趣旨経歴、記録集発行、購読受付の説明をする者あり、個人的な感想や決意表明する者あり、黙



って聞いていた者あり、とさまざまであったが、関西の人々に関東-東京の様子的一端をお伝えできたようであった。

赤軍派は関西ブントから出発した。ここから東京へ、東京へと人、金を送り込み、政治局、中央軍を維持し、やがて連赤へ至る。全国から人は参集したが、結局関西が基盤だった。

しかしその関西ブントから見れば、赤軍派特に中央軍、さらに連合赤軍へいたる過程には、二つの崖があった。越えるべきだったのか、越えてはならなかったのか、評価はいろいろある。ただ関西出身の「山」での死者が山田さん一人であったことに象徴されるように、「連赤」の事態は関西のブント-赤軍派の人々の把握できる範囲を超えていたのだ。当時越えていただけでなく、今も越えているのだ。関西の人々の心やさしい発言を聞いていて、そう思った。

また、当日回覧された山田さんの写真のなんと若々しい青年振りであること！当時二十歳代だから当然といえば当然なのだが、僕の知っている彼は物静かで常識のありそうな、どちらかといえば陰気がちな年寄り、という印象だった。結局三十数年経って、生き延びた者が五十歳代や六十歳代になっていた、というわけである。

この点では、逮捕直後の老け作りをした森の写真も、当時新聞で見て驚いたものだったが、今となっては若さのほうが目につくことになるのかもしれない。

(文中敬称略)

端正で剛直な「兵士」の証言 —『連合赤軍少年A』—

雪野 建作

加藤倫教著 新潮社刊



1985年頃の春、私は愛知県刈谷市の加藤宅を訪ねた。加藤能敬君の父上にお会いし、私たちの運動の誤りについて謝罪して、能敬君の位牌に焼香し、合掌した。父上は「よく来てくれました」と言われただけで、一言も私達を責めるようなことは口にされなかった。

証言 No.1 2004.4.25

能敬君の弟で、浅間山荘で逮捕された「少年A」、加藤倫教君が出獄する数年前のことである。

出獄後、倫教君は事件の当事者として証言することを自らの義務とし、マスコミの取材に対しても、興味本位なものでない限り、誠実に対応してきた。昨年企画された連赤問題の学習会にも当事者として出席し、報告と質疑応答を行った。しかし、これらの証言は時間も限られ、限られた内容にとどまらざるを得なかった。そのとき、彼は、事件後30周年に際して週刊誌に寄稿した原稿が大幅に削られた、と不満を述べていた。

四六版216ページに及ぶ本書の出版でも、原稿はかなり削られたという。しかし、今回は「一般の読者にとっては不要な部分が整理されて、これはこれでよかったとも思う」と述べており、語るべきは語りつくした心境にある。

内容は端正で、剛直である。政治的バランス感覚も的確だ。連合赤軍の革命左派系指導部、永田・坂口両名の著書と比較しても、政治的にははるかに成熟した印象すら与える。

「(逮捕されて連行する際)私はただ前を真っ直ぐ見つめて歩くことを心に決めていた。…」

私は、正しい情勢分析をすることができなかったのだ。自分が立ち上がることで、次から次へと人々が革命に立ち上がり、小から大へと人民の軍隊が成長し、弱者を抑圧する社会に終止符が打たれる。そんなことを主観的な願望だけで夢見ていた。

その自らの浅はかさ、未熟さを思い知り、自分を打ちのめしてやりたいほどの悔しさを感じていた。だから、逮捕され、引き立てられていくことには何の感慨もなかった。

ただ、せめて正義を実現する社会を夢見た志だけには誇りをもち、毅然と歩こうと考えたのだった。」

私が「剛直」と感じるのは、このくだりである。

人は、かつて考えていたこと、公言していたこと、その他諸々の事情に縛られており、「自由に考えること」は決して容易ではない。面子や、「他人がどう思うか」ということへの顧慮、組織内での地位や社会的生活に及ぼす利害の打算、それまでいっていた思想・信

条の呪縛、これらすべてが自由な思考と透明な判断を妨げる。

坂口弘が武闘路線に対して同じ認識に至るには、これから3年余の月日を要した。その理由について坂口はいみじくも次のような趣旨のことを述べている。

—「武闘路線の誤りを認めてしまうと、自分や同志たちがこれまで払ってきた犠牲がすべて無駄になってしまう。このように考えて、これまではどうしても誤りを認めることができなかった。

しかし、誤りは誤りであって、いくら否定しても仕方がないことがわかった。」

このような事情は坂口に限らず、獄中のほとんどの革命左派のメンバーは、武闘路線の総括について同様の経過をたどっている。

これに対して倫敦君は、自由な思考を妨げる私心に妨げられずに、すでに浅間山荘の戦いが終わった段階でこのような認識に到達している。自らの戦いが占めている歴史的・政治的位置が、客観的に正確に把握されている。

浅間山荘と山での破局が明らかになった直後に、指導者の川島豪と全面的な論争を開始した私の例とともに、加藤倫敦のケースは例外中の例外である。

倫敦君は出獄後においても、かつての志を忘れることなく、しっかりと足取りで歩んでいる。

本書には、そのような自由な精神と太い芯の通った知性に映った「連合赤軍」が描かれている。

名古屋の運動の状況、特に、東海高校での運動の記述は、当時の学生・生徒の運動の気分と勢いを活写している。

このような事情は、全国至るところの高校で見られたのだ。

名古屋でわれわれが展開した運動と組織活動についての記述も正確である。名古屋での組織化の特徴は、高校生グループを除いて、大学生でなく、労働者のグループとの協議と交流が中心だったことである。本書にも、その一端が記録されている。

いまひとつ印象深いのは、浅間山荘の前後で倫敦君が指導部に対

して何度か意見を述べ、それが無視されたことでもはや指導部に対して意見を述べる気を失っていた経緯である。ここに、当時の指導部と被指導部の典型的な関係が象徴されている。

能敬君が榛名で指導部に意見書を提出して異議を申し立てた前後の記述も印象的で痛切だ。革命左派の指導部の無能と傲慢と対比して、骨のある平党员だった能敬君の原則性と勇気に心を打たれる。

その兄の能敬君を失ったときの悲痛な叙述。

名古屋での私の一年間の活動がなかったら、倫敦君とその弟は、このような過酷な体験をしないですんだかもしれないことを思う。

倫敦君は、本書を、やがて思春期をむかえる「子供達のために」書いたという。しかし、本書はこれまでの関係者の手記の中でも優れた記録であり、連合赤軍問題を考える方は、ぜひとも一読されることをおすすめする。

註

- 註1 第二次ブント：(第二次)共産主義者同盟。66年9月に関西ブント、独立社学同、ML派、マル戦派等で再建。
- 註2 羽田闘争：67年10月8日第一次羽田闘争。佐藤栄作首相訪ヴェトナムを阻止すべく、三派系全学連が羽田空港をめざした。ヘルメットと角材で「武装」した街頭実力闘争の時代の幕開けとして記憶される。京大生山崎博昭君殺される。
- 註3 国際主義と組織された暴力：ブントは67年10月8日の闘いをこう総括した。後に第二次ブントの象徴的なスローガンに。
- 註4 エンプラ闘争：68年1月アメリカの原子力空母エンタープライズの佐世保寄港阻止闘争。
- 註5 三里塚闘争：新東京国際空港（成田空港）建設反対闘争。66年7月、成田市三里塚に空港建設を閣議で一方向的に決定した事に対し、現地農民を中心に反対闘争が起こり、社会党から新左翼までの全国的な闘争に発展した。
- 註6 中央権力闘争：政策反対闘争に対置された権力奪取に向けた闘争。
- 註7 中核派：マルクス主義学生同盟中核派。革命的共産主義者同盟全国委員会の学生組織だが、全体を中核派と通称した。
- 註8 10・21の防衛庁闘争：国際反戦デー。68年10・21は中核派などは新宿駅を占拠し騒乱罪の適用があったが、ブントは権力中枢制圧を掲げて防衛庁突入を図った。
- 註9 マッセンスト：Massen Streik 大衆スト。労働組合の組織的決議を経ないで行うストライキ。
- 註10 11・7：68年11月7日「安保粉碎・沖縄闘争勝利」を掲げ、国会・首相官邸に突入を図る。
- 註11 RG：Rote Gewalt エルゲー。後の共産同RG派とは別のもの。
- 註12 社学同：社会主義学生同盟。共産主義者同盟（ブント）の学

生戦線。このころまでの新左翼各派は、実質的に動員できるのは学生部隊がほとんどだった。

- 註13 フラクション：fraction 部分、分派。
- 註14 ブツ：この場合は火炎ビンや爆弾などの事。非合法の物を指す隠語。
- 註15 上野：上野勝輝、後に赤軍派政治局員。
- 註16 荒：荒岱介、ペンネーム日向翔。早稲田大学出身、後に共産同戦旗派を結成。
- 註17 中大派：社学同の中央大学を拠点としたグループ、後の叛旗派への流れ。
- 註18 ヨッチャン：高橋良彦、ペンネーム松本礼二。全電通労組出身、元共産同議長、共産同情況派「遠方から」グループ、故人。
- 註19 味岡：味岡修、ペンネーム三上治。中央大出身、共産同叛旗派を結成。
- 註20 仏（さらぎ）：右田昌人、ペンネーム仏徳二。元共産同議長、共産同仏派（蜂起派）を結成、故人。
- 註21 学対：学生運動対策部、学生運動担当のこと。
- 註22 高原：高原浩之、後に赤軍派政治局員。
- 註23 反帝全学連：68年7月に三派全学連から中核系と分裂したブント・解放派系全学連。更にブント系、解放派系とに分裂する。
- 註24 フラク化：指導部の分解に伴い、それぞれがフラクション（分派）化すること。
- 註25 共青（共産主義青年同盟）：ブントの青年戦線組織。
- 註26 青対：青年運動対策部、青年運動担当のこと。
- 註27 「現代革命」：後に赤軍派に向かうフラクションの学習パンフ。
- 註28 プロ独：プロレタリアート独裁。ブルジョアジーの独裁である資本主義政権を革命で打倒した後、社会主義建設への過渡的な国家権力形態とされる。
- 註29 「帝国主義論」：レーニン著『資本主義の最高段階としての帝国主義』。独占資本と金融資本とによる国内支配、資本輸出と列強間の国際的なトラストによる世界の分割、植民地支配等を特徴づけた。
- 註30 市場再分割戦：先発帝国主義諸国によって分割された世界市

場を、後発の帝国主義国が自らの植民地を求めて再分割しようとする争い。

註31 帝国主義戦争：世界市場の分割、再分割をめぐる帝国主義国同士の戦争。

註32 労働者国家：いわゆる社会主義国。

註33 根拠地国家：後に国際根拠地論になっていくが、国際的な階級闘争において労働者国家が根拠地となりうるということである。

註34 ヴェトナム情勢：60年頃からの南ヴェトナムでの独裁政権に対する武装闘争に対しアメリカが軍事介入、65年に北ヴェトナムへの爆撃を開始、以後急速に拡大。67年拡大激化、68年和平交渉開始、69年段階的撤退開始。

註35 一向過渡期世界論：塩見孝也、ペンネーム一向健による、68年1月の「ゲバラ・カストロ路線と我々」、8.3論文第一章などのこと。資本主義から社会主義への過渡期における、世界プロレタリアートの登場による攻撃型階級闘争を主張。

註36 田原芳：同志社大出身、第二次ブント関西地方委員会議長。

註37 日韓闘争：65年日韓条約締結反対闘争。日韓条約案において大韓民国政府を朝鮮半島における唯一の正当政府と認めるものとなっていたため、朝鮮半島分断固定化として問題になった。

註38 都学連：東京都学生自治会連合。三派全学連再建に先立ち65年7月に結成。

註39 再建三派全学連：全日本学生自治会総連合。60年安保闘争後分裂、66年12月に社会主義学生同盟、社会主義青年同盟解放派、マルクス主義学生同盟中核派の三派を中心に結成。

註40 第一次ブント：第一次共産主義者同盟、58年12月結成。日本共産党六全協、スターリン批判、ハンガリー動乱等による前衛党神話の崩壊と国際共産主義運動史の見直しの中で、東大細胞を中心として結成された。初代議長島成郎。

註41 60年安保：日米安全保障条約の60年改定問題で、国内を二分する大闘争に発展。

註42 三池闘争：石炭から石油へのエネルギー政策転換の中で59年に三井鉱山三池で大合理化・指名解雇が提案、ロックアウトとストライキの激しい攻防を展開し第二組合結成、暴力団投入等

の中で、「総資本対総労働」の攻防を展開するも60年11月敗北終結。

註43 第一次ブント解体の分派闘争の総括：第一次ブントが安保闘争の中で闘争方針を出し得ずに解体していき、主に三分解したこと、以後のブント系にとってはこの問題をどう総括するのかが、組織論・運動論のうえで重大な問題となった。

註44 プロ通、革通、戦旗：60年ブントが3分解したプロレタリア通信派（全学連書記局細胞中心）、革命の通達派（東大細胞中心）、戦旗派（労対グループ中心）のこと。

註45 ML派：社会主義学生同盟マルクス・レーニン主義派。後に毛沢東思想に傾斜して行きML同盟を結成。

註46 反スタ主義：反スターリン主義。

註47 プロ文革：プロレタリア文化大革命、1966-76 中華人民共和国における、社会主義段階での階級闘争の継続を掲げた政治・思想・文化闘争。

註48 レジス・ドブレ：Regis Debray 40.9.2生 フランス人。60年代ラテンアメリカ革命にゲバラと共に参加、67年ボリビアで禁固30年宣告、70年釈放。81年にはミッテラン政権の外交特別顧問に。

註49 カルチェ・ラタン：Quartier Latin パリの学生街ラテン区のこと。68年5月、この区のソルボンヌ大学の学生が中心となり街頭バリケードを築いて警官隊と衝突。5月革命の引き金に。

註50 五月革命：68年5月カルチェラタンでの学生の闘いを機に労働総同盟（CGT）はじめ主要労組がゼネストに突入。市民も含めてド・ゴール体制に反抗。

註51 ブラック・パンサー：Black Panther Party アフリカ系アメリカ人解放運動の政治結社。66年に結成し、「武装による自治」を主張、展開した。

註52 ウェザーマン：Weatherman アメリカのSDSから69年6月分裂した武装闘争派、爆弾闘争などを展開。

註53 SDS：Students for a Democratic Society 民主社会のための学生連盟 62年頃、主にアメリカ北部の欧州系学生を中心に結成。

註54 SNCC：Student Nonviolent Coordinating Committee

学生非暴力調整委員会。アフリカ系への人種差別に反対する、非暴力直接行動の学生組織として60年に、主にアメリカ南部のアフリカ系学生中心に結成。地域社会での人種差別撤回、公民権運動で中心的役割。65年頃からBlack Powerを提唱。

註55 世界革命の第三の潮流：従来の国際共産主義運動にはソ連派と中国派の二つの流れがあった。これに対して世界革命を目指す新しい潮流としてラテンアメリカの革命運動（ゲバラ・カストロ路線と呼んだ）や、先進国の武装革命路線を位置付け、自分達もこの一環であるとした。

註56 OLAS : Organizacion Latinoamericana de Solidaridad ラテンアメリカ人民連帯機構 66年1月の三大大陸人民連帯会議参加のLA諸国代表の合意に基づき創設。反帝・反植民地主義、人民の戦闘的連帯を目的に。

註57 松田政雄：元日本共産党、後に無政府主義者。映画評論家。

註58 西ドイツのSDS : Der Sozialistisch Deutsche Studentenbund ドイツ社会主義学生同盟。

註59 インター系：第四インターナショナルの系列

註60 世界党、世界赤軍、世界反帝統一戦線：8・3論文で展開された、世界単一の党一軍一統一戦線の結成の呼び掛け

註61 佐竹茂：ペンネーム渚雪彦。東大出身、

註62 河北：河北三男。日本共産党革命左派創始メンバーの一人、元ML派、故人。

註63 青解：社会主義青年同盟解放派

註64 反帝反スタ：反帝国主義・反スターリン主義、革共同両派の基調的理論。帝国主義諸国を打倒すると共にスターリン主義諸国も解体していこうというもの。

註65 革マル派：日本革命的共産主義者同盟革命的マルクス主義派、学生組織はマルクス主義学生同盟革命的マルクス主義派。

註66 「理論戦線」：社学同理論機関誌。

註67 マル戦：社学同マルクス主義戦線派。革命の通達派の流れ、岩田弘の国家独占資本主義論に依拠し、資本主義の全般的危機を基調とした。

註68 本多：本多延嘉。革命的共産主義者同盟全国委員会（＝中核派）書記長、75年3月14日革マル派の襲撃で殺される、41歳。

註69 戦旗社：共産主義者同盟の「本社」。

註70 医科歯科大：東京医科歯科大学。

註71 川島豪：日本共産党革命左派の最高指導者。東京水産大出身、元マル戦派、故人。

註72 ボス交：大衆的な闘争にしないで、または大衆的な討議に付さないで、指導部だけで交渉してまとめてしまうこと。

註73 2・2協定：67年明治大学費値上げ反対闘争の渦中で、大学理事会と自治会執行部が妥結協定を結び闘争終結を宣言し、多くの学生大衆から反発を受けたもの。再建全学連の委員長が明大出身だったため、全学連内にも問題が波及した。

註74 外部注入論：レーニンによる、社会民主主義的（革命的）意識は労働者階級の自然発生的な経済主義、民主主義要求の延長上には生まれず、前衛党によって外部から注入しなければならないとする理論。

註75 文英堂闘争：京都・文英堂書店における労働争議。

註76 塩水港闘争：西大阪で反戦派が全金組合運動と結び付いて工場占拠まで行った地域労働運動の典型事例。

註77 電通：全国電気通信労働組合。NTTの前身、日本電信電話公社の最大労組。

註78 民同：民主化同盟。47年頃から産別会議等労働組合における共産党の影響力排除・民主化を主張して、労働運動の主流となり、50年にGHQの支持下に総評を結成。この場合は、総評のこと。

註79 日共：日本共産党のこと。

註80 大阪中電：大阪中央電報電話局。

註81 京浜安保共闘：革命左派の大衆組織。学生戦闘団、京浜労働者反戦団、婦人解放同盟などで69年8月結成。

註82 反戦青年委員会：65年8月日韓条約反対を目標に社会党青年局を中心に総評青年対策部、社青同、主要単産青年部などで結成。その後、新左翼系労働者の組織へと変化。

註83 県立川崎高校：神奈川県立川崎高校。革命左派は定時制高校に下部組織をもっていた。

註84 三国工業：東京都大田区蒲田にあった三国工業株式会社のこと。

- 註85 反戦団：京浜労働者反戦団。革命左派の労働者組織。
- 註86 全民労連：全日本民間労組連合会。87年11月20日結成（委員長樫山利文）。同盟、中立労連の解散を受け、全民労協から発展。民間先行労戦統一の完成。89年に総評の解散を受け連合（日本労働組合総連合会）になる。
- 註87 IMF・JC：国際金属労連日本協議会。64年に自動車、鉄鋼、造船、電機、機械などの金属関係労組の組織として発足。民間先行の労働戦線統一の出発点といわれる。
- 註88 金属労協：全日本金属産業労働組合協議会。75年IMF・JCから改称。
- 註89 炭労：日本炭鉱労働組合、50.4.21結成。かつての基幹産業労組の一つ。
- 註90 国労：国鉄労働組合。旧日本国有鉄道最大労組、国鉄分割民営化の狙いの一つに国労解体があったといわれる。
- 註91 ヘゲモニー争い：Hegemonie（主導権）争い。
- 註92 IMF・JC宮田：宮田義二 24.4.23生。73年9月IMF・JC議長に。帝国主義的労戦統一を推進。88年鉄鋼労連会長、後に松下政経塾塾長にも。
- 註93 ジャパンアズナンバーワン：ハーバード大Ezra F.Vogel教授が79年に出した著書。70年代の不況とインフレの同時進行に苦しむアメリカ経済と、ドルショック・オイルショックを乗り越えた経済大国日本とを比較し、日本に学ぶことを提唱。
- 註94 全通（宝樹体制）：全通信労働組合委員長宝樹文彦（60～71）による、それまでの反合理化闘争から産業政策重視への転換路線。60年代末に社会党政権樹立に向け労働戦線統一を提唱。
- 註95 中越戦争：ヴェトナム戦争終結後、国境問題等を巡って関係が悪化し、ヴェトナムのカンボジア軍事侵攻に対し、79年2月17日中国が「懲罰する」として侵攻した。
- 註96 オルグ：organize 組織すること。
- 註97 ビッグユニオン：大組合、または大単産（単一産業別労働組合）。
- 註98 全民労協：全日本民間労組協議会、82.12.14発足（議長樫山利文）。70年代後半からのIMF・JCを中心とする帝国主義的労戦統一の最初の結実。

- 註99 スターリン：Iosif Vissarionovich Dzhugashvili 1879－1953 ロシア革命においてレーニン死後、一国社会主義建設を掲げてトロツキー、ブハーリンらを斥け、党独裁一人崇拜に至る。
- 註100 経済学教科書：『ソ同盟における社会主義建設の経済的諸問題』のこと
- 註101 アパルトヘイト：Apart-heid（隔離）。特に南アフリカ共和国における欧州系人種によるアフリカ系・アジア系等に対する徹底した人種差別政策を指す。
- 註102 プロレタリア国際主義：資本主義が民族国家を基盤とするのに対し、労働者は階級として世界性を持ち、国際的に連帯・団結しようとされた。「万国の労働者団結せよ」。
- 註103 早稲田闘争：65年末から66年にかけて、第二学生会館の管理運営と授業料値上げ反対を巡り全学共闘会議を組織し全学ストライキで闘ったが、機動隊導入、大量処分の中敗北した。
- 註104 反産協（反産学協同）：教育において産業界と学校とが協同することに対し、産業界の要請に応じた教育は教育の自立性を犯すものとして反対すること。
- 註105 グラムシ：Antonio Gramsci 1891－1937 イタリア共産党創始者の一人。
- 註106 トリアッチ：Palmiro Togliatti 1893－1964 イタリア共産党創始メンバー。
- 註107 イタリア構改路線：暴力革命ではなく、広範な国民の支持の下に社会構造・経済を具体的に改良することで社会主義実現を目指すイタリア共産党の革命路線。
- 註108 唯武力主義：あるいは唯武器主義。革命の問題を政治権力の問題に切り縮め、さらに軍事の問題に切り縮めてしまう傾向のこと。
- 註109 ゲヴァルト：Gewalt 暴力、威力。
- 註110 プロレタリア階級形成論：プロレタリアは自身としては階級として団結していないため、どうやって階級的団結＝階級形成するのか、外部注入論等も含め、共産主義においては重大なテーマであった。
- 註111 森恒夫の共産主義化論：兵士の「脱走」や逮捕者の屈伏（自

供)が相次ぐ中、どうすれば権力に負けない「強い」党、軍、兵士が形成できるのか、という問題意識で「共産主義化」というものが考えられ、個々の兵士の強化=共産主義化として山岳ベース(アジト)での「総括要求」が行われた。

註112 出牛：出牛徹郎。弁護士、連合赤軍統一公判弁護人の一人。横浜国大出身。

註113 榛名：群馬県榛名山中に革命左派が設定した榛名アジトのこと。

註114 向山君：向山茂徳。革命左派活動家、小袖アジト入山後離脱し、71年8月10日殺害される。20歳。

註115 早岐さん：早岐やす子。革命左派活動家、丹沢アジトから調査活動中に離脱し、71年8月4日殺害される。21歳。

註116 新倉：山梨県早川町南アルプス山中に赤軍派が設定した新倉アジトのこと。

註117 チャカ：拳銃のこと。

註118 小袖：東京都奥多摩町と山梨県丹波山村との境の小袖川沿いに革命左派が設定した小袖アジトのこと。

註119 寺岡：寺岡恒一。革命左派活動家、横国大出身、軍の指揮者として活動、72年1月18日榛名アジトにて殺害される。23歳。

註120 7・6：69年7月6日、明治大学でのブント内主流派と赤軍派フラクとの衝突。破防法で手配中の仏議長に重傷を負わせ、結果的に逮捕させてしまった事件。

註121 大菩薩：69年11月5日、赤軍派が大菩薩峠で軍事訓練を行い、53名が一網打尽に逮捕されてしまった事件。

註122 渥美：京大出身、共産同第8回大会書記長。

註123 バラキン：榎原均。京大出身、共産同関西地方委労対責任者。

註124 「プロ通」：「プロレタリア通信」。

註125 官邸占拠：首相官邸占拠の計画のこと。

註126 「赤軍」の戦争宣言：69年9月3日「戦争宣言」のこと。新泉社『赤軍ドキュメント』所収。

註127 大阪戦争：69年9月22日、大阪阿倍野署交番を火炎ビンで襲撃。

註128 東京戦争：69年9月30日、警視庁本富士署を火炎ビンで襲撃。

註129 本富士署：文京区本郷、東大の側にある警視庁本富士警察署。

註130 田宮：田宮高麿、赤軍派政治局員。大阪市立大出身、よど号ハイジャックで平壤へ、客死。

註131 松平：松平直彦、赤軍派中央委員。

註132 P缶：煙草のPeaceの缶を使った爆弾。

註133 レッテル：ビンに詰めたガソリンを発火させるための、薬品を染み込ませた紙のこと。

註134 若宮：若宮正則、宇和島水産高出身、大菩薩事件で逮捕、72年爆弾事件で再逮捕、90年にペルーにわたり客死。彩流社『釜ヶ崎赤軍兵士 若宮正則物語』。

註135 土・日・P：71年土田警視庁警務部長宅爆弾事件、日本石油ビル地下郵便局爆弾事件、69年ピース缶爆弾事件の犯人として10数人がでっち上げ逮捕一起訴された。後に全員無罪判決を勝ち取る。

註136 ワンゲル：wandervogel 1901年にドイツで開始された青年徒歩旅行運動、日本では山歩き(hiking)といった意味。

註137 ガサ：警察による強制家宅捜査のこと。

註138 タッチアウェイ：touch away 接触して即時に離れること。

註139 ハイジャック：hijack 強奪すること、転じて飛行機を乗っ取ること

註140 ハイジャック声明：70年3月30日付、田宮高麿による「出発宣言」のこと。『赤軍ドキュメント』所収。

註141 キップ：逮捕令状の隠語。

註142 ロシアの十月、冬宮蜂起：1917年露暦10月24日、10月革命の最終段階、サンクトペテルブルグの冬宮にあったケレンスキー政府に対するボルシェヴィキの武装蜂起。ほとんど無血でペトログラード・ソヴィエトに権力は移行した。

註143 清水丈夫：革共同全国委員会政治局員。

註144 PBM作戦：ペガサス(Pegasus ハイジャックまたは要人誘拐による赤軍派指導部奪還作戦)、ブロンコ(Bronco 日本=防衛庁、アメリカ=ペンタゴン同時突入作戦)、マフィア(Mafia 金融機関強盗などによる資金調達作戦)。

次号予告

連合赤軍殉難者追悼の会（2003年2月23日）の記録を掲載します。

編集後記

全体像の会は、連合赤軍事件のいわゆる総括論議をしようとか、再建しようとか、武装闘争を再開しようとか、そういう集団ではない。関係者への取材を通して、各人の関与した時期、立場による体験の違いを超えて、できる限り全体像に迫ろう、そういう記録を残そうとしている。何が革命派で何が反革命かとか、誰が正しくて誰が間違っていたとか、殺されたものの立場に……とか、そういう地から浮いた観念的な視点からは、せっきくのあの崩壊体験から収穫を得ることはできない。世界とこの国の不合理に立ち向かおうとする人々、特に若い人々に、われわれの負の遺産を、われわれなりに消化して提示する。これがわれわれの果たすべき(果たすことのできる)歴史的責任である。よる体験の違いを超えて、できる限り全体像に迫ろう、そういう記録を残そうとしている。何が革命派で何が反革命かとか、誰が正しくて誰が間違っていたとか、殺されたものの立場に……とか、そういう地から浮いた観念的な視点からは、せっきくのあの崩壊体験から収穫を得ることはできない。

世界とこの国の不合理に立ち向かおうとする人々、特に若い人々に、われわれの負の遺産を、われわれなりに消化して提示する。これがわれわれの果たすべき(果たすことのできる)歴史的責任である。(関)

今回の八木氏の聞き取りの会では、三戸部さんが論議をリードし、当時の学生運動を指導していた立場から視野の広い論点を提起している。三戸部さんについて知らない読者も少なくないと思われるので、ここで補足したい。

三戸部さんは横浜国大学芸学部出身の活動家で、革左前身の我々にとっては、拉致されて暴行を受けたり、多少はやりかえしたり、因縁浅からぬ人物である。横浜国大の革命左派の活動家は、私より1年上の世代であれば、互いに面識があった。

ML派が解体した後、仏門に入り僧侶となった。

過去の因縁からすれば、いわくのある顔合わせであるが、84年頃より、会の前身となったグループの中心メンバーとなって活躍した。

本書は、三戸部さんの遺志の実現でもあり、「ようやくここまで来た」という感慨が深い。(雪野)

編集・発行

連合赤軍事件の全体像を残す会

連絡先

神奈川県大和市桜森2-25-14-101

黒宮 雪彦

TEL.046-262-1858

購読お申込み方法

購読のお申込みは、郵便振替でお願いいたします。

郵便振替 00250-5-130190 全体像を残す会

1年(6号分送料込み) ¥6,000

証言 連合赤軍 1

——大菩薩への道——

2004年4月25日発行

編集・発行 連合赤軍事件の全体像を残す会

印刷・製本 株式会社平河工業社

発売元 情況出版

〒162-0054 東京都新宿区河田町3-15

TEL. 03-5368-4308

©2004

ISBN4-915252-67-1



9784915252679



1920095009520

ISBN4-915252-67-1

C0095 ¥952E